ISSN 0385—7786

福岡市立歴史資料館

研　究　報　告

第　3　集

1 9 7 9
福　岡

福岡市立歴史資料館蔵

福岡市立歴史資料館

研　究　報　告

第　3　集

1 9 7 9
福　岡

序

このたび，福岡市立歴史資料館より研究報告第三集を刊行することになりました。

この論集は，資料館運営の中枢，学芸部門の関係者各位による重要な基礎的研究活動の一端を公表するものでありますが，今後の研究にいつそうの進化をもたらす資料ともなるものであります。

市民各位ならびに研究者各位の御鞭撻と御協力をお願い申し上げます。

昭和54年3月31日

教育長　戸　田　成　一

この研究報告第三集には，当館の史資料研究に関わる二つの論文を収めています。

その一，三島　格氏の「館蔵本『豊前・筑前其他出土考古品図譜』解題」は，当館で昭和48年度に購入した図譜が，明治時代前半から後半にわたって記された，本県考古学界の揺らん期における見のがせない史料の一つであることを調査紹介されたもので，その二，筑紫　豊氏の「福岡藩の国学者青柳種信の研究（三）―沖ノ島防人日記―」は，種信の万葉的素養の豊かさと国学的学殖の非凡さをうかがわしめるさまを実証的に考察されたものです。

今後とも，本報告の内容充実のため館員一同努めてまいりますので，各位のいっそうの御指導と御支援を切にお願い申し上げます。

昭和54年3月31日

館長　石　橋　　博

目　次

館蔵本「豊前・筑前其他出土考古図譜」解題……三　島　　格　1

福岡藩の国学者 青柳種信の研究(三)―瀛津島防人日記―……筑　紫　　豊　一

館蔵本「豊前・筑前其他出土考古品図譜」解　題

三　島　　格

1.　はしがき

本図譜は，福岡市立歴史資料館が昭和48年度に購入した図書（註1）であるが，その後再見の折を得て，その重要性を改めて知った。それは収録された遺物のすべてが発掘によるものではないにせよ，出土・採集地および当時の所蔵者が明確であり，かつ重要な遺物を含むこと。現在の遺跡地名表に記載されていない地名・遺物がかなり認められ，さらには戦後の調査で著名になった番塚（註2）や竹並（註3）などの遺物をも含んでおり，それらは遺跡の研究史上からも重要である。加えて本書の成立年代から推して，わが国のあるいは福岡県の考古学界の揺籃期の姿相を，垣間見る資料を含むなどの諸点である。なお，本文の性質上所収遺物の解説は，今回は省略したが，関係文献の一部は目録の註で示し，遺物数点を文末に示した。

2.　法　量

横19㎝，縦26.6㎝の仮綴本である。

3.　紙数・紙質

やや厚手の黄色紙で装丁されているが，表紙の一部は破損。各頁は和紙2枚を貼り合せて1枚とする場合と，別紙をそれに貼布する場合などがある。整理の都合上各紙にナンバーを付し，頁とした結果360頁となった。ただし巻首には若干の欠失紙がある。それは現存第一頁の記載が其三から始まっていることと，欠失部の旧状を少しく遺存することから判明する。描画の多くは毛筆による墨画であるが，それに彩色を施したもの，あるいは鉛筆画や拓影なども，僅かながらある。360頁のすべてに描画・註記があるのではなく，113頁にわたる未記入の空白ページがある。また裏見返しに図示（図13）のような，方形状の朱肉による捺印をした小紙片を貼布する。この印章については後記する。

4.　書　名

表紙に横3.5㎝，長さ20.5㎝の縦長の紙片を貼布し「豊前筑前其他出土考古品図譜　全一冊」

と墨書するが，これは原記録者によるものではない。原記録者の手をはなれてからの経緯は不明であるが，資料館へ納入した古書店主による記入貼布であることは，その衝に当った私が同人より確認しており明らかである。けれども原名を尋ねるに由ない現在にあって，しかも館の公簿上登録された書名でもあるので，原記録者の意に反するかもしれないが，これに従う。また全一冊であったかどうか，判断の材料がないので，後補のこの三文字については，本文においては書名としなかった。なお同文の背文字があるが，これも後補である。

5. 目　録

原書には，もとより目録はないが，使用の便を考えて，別記の項目を立てて目録を作製した。頁数の欠は前記のごとく未記入空白分である。項目中の記事欄には原書の書き入れを可能な限り収めた。出土地は原地名を使用した。目録中の括孤は三島によるものである。つぎに，目録を作製して気付いたことであるが，本図譜は原記録者が折々に筆録した各種の資料を，ある時期に大まかな項目別に分類して，最終的に装丁し，一冊の成書となしたことが，記録年次によって推察される。このことは第9節でもふれる。ただし装丁者が原記録者であるのか，以外の人物であるのかは，確定できない。おそらく前者であろうという印象をうける。

6. 所収遺物および出土地（図1～13，文末付図の頁は目録頁と一致）

所収の遺物は，目録の遺物名欄に示したが，約470点以上を数える。時代的には，縄文・弥生（註10）・古墳時代および以降の歴史時代にわたるが，その中にあって，数的にもっとも多いのは，古墳時代の遺物である。これは明治20年代という学界初期の動向の一つを反映するものともいえようし，反面原記録者がその環境にめぐまれた地域に，居住していたことを示唆する材料になるかもしれない。

所収の遺物は，例外を除き，出土地・採集地が明記されているので，つぎにその頻度を記すが，煩瑣をさけるために，福岡県内分は郡毎に整理し小字名などは省略した。県外および外国は国名のみを記す。

①豊前国

仲津郡	52	築城郡	1
京都郡	8	宇佐郡	3
企救郡	13	田川郡	12

②豊後国

大分郡	1	大野郡	1

③筑前国

遠賀郡	2	志摩郡	1
三笠郡	2	那珂郡	1

怡土郡　2　　嘉摩郡　3

鞍手郡　2

④筑後国

生葉郡　3　　三潴郡　1

⑤県外および外国

備前・奥州各国・伊勢・阿波・土佐・讃岐・越後・信濃・飛騨・尾州・大和・山城・武蔵・下野・相模・肥後・琉球・大韓民国・アメリカ・フランス

上記について，注目すべきことは，福岡県内にあっても，圧倒的に多いのは豊前国で，その中でも仲津郡（明治29年に合併して，京都郡となる）が最多で，ついで企救郡（現北九州市）・田川郡・京都郡とつづくことである。このことも先述の原記録者の環境条件と対応するものであるかもしれない。ついで注目すべきは，遺物の収録範囲が九州以外にも及び，北は奥州諸国・南は琉球にいたる，かなり広範囲であることで，時には後章でのべるように中央学者の指導をうけつつ，全国各地の同好の士が相互に情報を交換し，研鑽していたことが察知できる。

7.　中央学界との交渉

本書には，当時すでに東京在住の学者との交流があったと認められる資料がいくつかある。今それを摘記すると，①明治22年（1889）神田孝平先生に寄贈（P. 52，註4）。②同21年（1888）東京人類学会に寄付（P. 61）。③同年坪井正五郎理学士（註5）と共に縄文式土器を木月貝塚よりうる（P. 285-86）などの註記がそれである。はしがきにのべたように，本県の考古学史上看過できない史料であろう。

8.　原記録者をめぐる所蔵者群

本節では，福岡県内に限定して収録された所蔵者を，可能な限り郡村別に示す。その意図は二つある。一つは約20人の人士が活躍したのは，約一世紀以前のことであり，現在では孫の方々の時代であろうが，もしやこれらの遺物の一つでも保存されてはいないかという程度の，軽い好奇心から出たもので，いわば筆者の一種のおせっかいでもある。けれども本県考古学界が好古から考古へと転換する揺籃期に，県北部を中心にこれだけの熱心な収集家がおられたという事実は，驚異であり，後続のわれらは，記録して後世にのこすべきだという，義務感ともいうべき情感が底流として作用したことも事実である。二つには，もっと現実的な目的であるが，その前に所蔵者名を次にかかげる。

仲津郡　鹿島・尾形昌三・守田・松島・柏木・坂井新蔵・古賀仙平・※家蔵。

企救郡　佐野径(ママ)(常)彦・佐野・(太祖神社)。

田川郡　(香春神社)・(香春警察署)・福島。

遠賀郡　伊藤松延（中間神宮)。

京都郡　岡崎昌平治・鈴木鉄太郎<二名トモ苅田村>。

那珂郡　江藤(志摩郡) 磯野七平。

怡土郡　管(菅)六郎<前原村>・江藤正澄。

生葉郡　田代離三<朝田村>。

嘉摩郡　江藤正澄・藤崎理三郎<千手村>。

宇佐郡　<佐田神社>。

上記約20名の人士は，相互に親交があったであろうことは，容易に推察できるが，筆者の不勉強のせいで，早く筑紫豊先生（註6）によって紹介された江藤正澄氏と，同じく同先生の教示によって知り得た尾形昌三氏の業績（註7）を，わずかに知り得る程度である。

ここで二つ目の現実的な問題に入る。それは仲津郡の末尾に家蔵なる二文字の署名を遺した人物（※印）についてであり，この人物こそ，本図譜の原記録者である。

家蔵とする遺物には，隣接地方のものもあるが，圧倒的に仲津郡出土が多い。第6節でのべた原記録者に対する私の映像は，ここでも対応するが，家蔵なる署名を遺した人物は，この段階ではまだ実像とはならない。

9.　成立年代と原著作者

本図譜の成立年代をうかがうに足りる材料は，作者が遺物の傍に註記した年次を手がかりとするほか，現在のところ皆無である。以下年次の明かなもののいくつかを下記に示す。ページは本図譜のページである。

① p．98　明治12年1月27日謹写。

② p．276　明治16年太宰府参詣途次同地ニテ獲之。

③ p．260　明治21年5月20日写。

④ p．289　明治21年5月21日香春警察所ニ於テ見ル。

⑤ p．61　明治21年6月東京人類学会ニ寄付。

⑥ p．37　明治21年10月松田賢三郎持参写之　家蔵。

⑦ p．286　明治21年12月鞍手郡下木月村字貝売畑ニテ理学士坪井正五郎ト共ニ獲ル所ナリ。

⑧ p．72　水町村ニテ22年6月8日獲之　家蔵。

⑨ p．71　22年6月25日北方村ニ所獲。

⑩ p．52　明治22年6月神田孝平先生ニ寄贈ス。

⑪ p．40　23年4月9日写。

⑫ p．226　明治23年4月写。

⑭ p．302　明治24年5月24日同所ニテ獲之。

⑮ p．337　明治24年5月　家蔵。

⑯　p．271　明治24年11月甚兵衛掘出。

⑰　p．28　25年6月20日。

⑱　p．120　明治26年1月30日加来重信君寄蔵。

⑲　p．281　太宰府町明治26年7月。

⑳　p．54　明治27年2月27日模写ス。

年次の明らかなものは，上掲のごとくである。もっとも，著者は描画の度にその年月日を必らずしも記入はしていない（例えば P.3, 9-12, 72-73 以下かなりある）点もあるので，そのことを考慮に入れる必要がある。こうした点を勘案しても，おおよその著者の活動期間の一斑が，上掲の年次によって，把握できよう。即ち最初期は，明治12年1月（1879）にさかのぼり，少しく中断し同16年に太宰府に詣で都府楼の軒丸瓦を拾いその拓影を収める。その後中断をみるが同21年以降，22～27年と連続した活動をしている。要約していえば明治12年（1879）ごろから同27年（1894）ごろの約15年間が，本図譜記録者の活躍した時期といえる。

ただ注意すべきは，最古期の明治12年の年次をもつ遺物（和鏡の拓影）の紙が，巻頭になく，上掲のごとく98頁に綴られていることであり，すでに第5節でのべたように，ある時期に原記録者が，大まかな項目別にまとめて，成書となしたことが，ここでも推察できる。

10.　印章について（図13・写真1）

第3節で，裏見返しに捺印（朱）をもつ小紙片の貼布があることをのべたが，本節ではその印章についてのべる。

印面の形状は，横3.5㎝，縦3.8㎝を測るが，さらに約3㎝平方の内区をもち，その中に二字二行の四文字を配する（図13・写真1）。文字は「真□寺印」と読んだが，第二字が判読できない。（註8）小田富士雄氏の教示によって，弘津史文氏の報文（註9）にあることが判明した。

弘津氏の報文は短文でもあり，同誌自体も入手困難であるのでつぎに紹介する。

「豊前国京都郡豊津国分寺東書院趾より発掘せしものにして，今余の蔵するところなり。印面は巾一寸二分長一寸三分二重枠の方形中に「真□寺印」の文字あり。第二の字は亨又は京或は卓かと思はるれども不明。会津恵日寺旧蔵印の内天長二年淳和帝の所賜といへるものと似よりたるものなり」

とのべ，印面および一孔の穿孔をもつ摘み（把手）の部分を写真（写真1，複写）によって紹介し，「豊前国分寺址発掘銅印」なる説明を付している。

つぎに，裏見返しに捺印された鮮明な印影が，上文弘津氏のそれの印影であることは間違いないが，弘津氏の発表は大正4年（1915）であり，上記9節においてのべたごとく，本図譜成立の年代とは，若干のへだたりがある。おそらく，弘津氏の所有に帰するまでのある時期に，本図譜記録者もしくは他の第三者による，印影を収録したのであろう。想像をたくましくすれば，記録者の志向がこの頃から古印に傾斜しかけていたのではと，考えられないでもない。

11. 結語—原記録者の像

以上，所要項目について本図譜の解題を不充分ながらこころみたが，既述のごとく肝心の原記録者については，ついに明確にし得なかった。強いていえば，次のことは言えるのではあるまいか。

①豊前国仲津郡か，もしくはその周縁の地に住いされた研究者であろう（6，8節)。

②活動期が明治12年（1879）から同27年（1894）にわたっていることと，書き入れの文字および文章が，若年のそれではないと推されることから，比較的長生されたとしても，大正末期から昭和初期ごろまでに存命であった方ではあるまいか（9節)。

現時点では以上のような曖昧模糊とした像しか，つかみ得なかった。けれども，探索の手がかりは絶無かというと，あながちそうでもない。原記録者をめぐる所蔵者群の節で，約20名の人士をあげたが，それらの遺族の方々にあたって，手がかりを摑むという手段である。今回はそれをなし得なかったが，やはり各界各位の援助を得て，埋もれた篤学の士の像を明かにすべきだと思う。

謝辞　本文執筆に際し，筑紫豊・三宅酒壺洞・鏡山猛・岡崎敬・森貞次郎・友石孝之・米津三郎・渡辺正気・小田富士雄・西村剛三・下条信行・白石巌・斎藤豊・北村慶子・金丸弘子 先生を はじめ福岡市立歴史資料館長石橋博氏以下館員諸氏の御教示と御高配を得た。深謝申し上げる。

註1　「福岡市立歴史資料館年報」No. 2　1975年　福岡。同書で紹介したおり，原記録者を豊前の柏木某氏かとしたが，訂正しておく。

註2　渡辺正気・松岡史「福岡県京都郡番塚前方後円墳」日本考古学協会　24回研究発表要旨　1959年。

註3　①『竹並遺跡—福岡県行橋市竹並所在遺跡の調査』竹並遺跡調査会　美夜古文化懇話会　1977年　行橋。②三島「腕輪二題」福岡市立歴史資料館研究報告1　1977年　福岡。

註4　神田孝平　かんだたかひら。天保1—明治31（1830-〜98)。『日本太古石器考』,「人類学雑誌」に報文多数。

註5　坪井正五郎　つぼいしょうごろう・文久3〜大正2　(1863〜1913)。「日本人類学会」,「人類学雑誌」の創設者。開拓期の日本人類学界に貢献。著書多数。

註6　筑紫豊編著『秋月が生んだ明治の文化人—江藤正澄の面影』秋月郷土館　1969年　甘木。によって江藤氏のことは知り得る。

註7　尾形昌三氏については僅かに下記を知り得た。①『京都郡誌』伊東尾四郎編　第4節古墳P. 98「郡内における古墳およびその発掘物のことにつきては，行橋町の尾形昌三氏最精し，編者はしばしば同氏を訪い—発掘の実験談を聴くを得たり」　②「豊前国美夜古平野の古代文化」(1)P. 58　定村責二稿『合本美夜古文化』「弥生後期の青銅製の広鉾が行橋氏金剛丸の尾形一郎氏や行事字出店の福島依氏の土蔵深くに保存されている」（圏点筆者—尾形昌三氏と尾形一郎氏は同族であろうか？なお昌三氏は昭和6年69歳で死去された。）上記①②については，友石孝之・筑紫豊先生の教示による。

註8　行橋氏在住の友石孝之先生から筑紫豊先生宛の私信によれば，京都・仲津両郡および企救・田川・築上郡内では，該当寺院はないとのことである。

註9　弘津史文「大和古銅印」「考古学雑誌」6-2　1915年　東京。
註10　下条信行「石戈論」「史淵」113　九州大学文学部　1976年　福岡。所収のNo. 62・33が本書のP. 52～53のそれである。
註11　『中間市史』上　P. 166　1978年　中間。
註12　島田寅次郎「石塚山の古墳」『史蹟名勝天然紀念物調査報告』福岡県　1　1925年　福岡。
註13　小林行雄『古墳時代の研究』青木書店　1961年　東京。
註14　小林「三角縁神獣鏡の研究―形式分類論―」「京都大学文学部紀要」13　1971年　京都。
註15　小川敬養「豊前小倉近傍ノ石剣」「東京人類学会雑誌」98　1894年　東京。
註16　山崎有信『豊前人物誌』文学　小川敬養の項　1939年。

＜追記＞

1. 第8節において，所収遺物の僥倖なる残存を期待したが，図版3の有柄石剣が遺存し，註11書に収録。
2. 原記録者かと疑われる人士について。1人は築上郡太平村出身の吉村鉄臣氏で他は小川敬養氏である。前者については脱稿までに調査ができなかった。小川氏は本図譜頁52～53所収の「明治22年6月神田孝平先生ニ寄贈ス」および「以上三箇家蔵」の書き入れがある石戈3本の内最左端を「「一筑前国鞍手郡富村大字磯光ノ土中ヨリ発見ス明治22年11月余ノ所蔵トナル」。印三島）とのべ，当該石斧を図示（註15）する。同年であるが月日が合わない。ことに小川氏は豊前地方の出土遺物を，同年代頃の同誌によく報告した人であるが，吉村氏を含めて，いまだ決定しがたい。前者については渡辺正気氏，後者は下条信行氏の示唆。
3. 前出小川氏は豊前小倉の出身であることが『豊前人物誌』（註16）によって判明した。「代言人として一画をよくす―（以下略三島）」と。やはり追跡すべき人物である。同氏については在福岡法務省諸機関・国会図書館・福岡市民図書館・東京大学人類学研究室・福岡，小倉弁護士会などの御厚配を得た。

5. 目　録（註　括弧内は三島の補記，付図の頁は目録の頁と一致）

頁	遺　物　名	出土地	所蔵者	記　事
1	甲（短甲）2			其三（短甲）
3	甲（短甲）1	仲津郡花熊村	家　蔵	其四（短甲）図版10右
4	冑　1			古甲冑（「桂園漫録」所収の短甲を抜書す。以下同）
5	冑　1			同　上（短甲）
6	冑　1			同　上（短甲）
7	冑　1			同　上（短甲）
9	轡　1	同郡木山村	家　蔵	
10	轡　1	同郡木山村	同　上	
11	轡　1	仲津郡花熊村	同　上	
12	轡　1	同　上	同　上	
13	轡　2	上奥州下備前		奥州白河大村土中所得 備前児島八幡宮
14	轡　1	伊　勢		伊勢内宮冠木鳥井辺堀池所得惣体鉄を銀にて包む
16	轡　1			「寧楽轡」
18～19	上（金銅製履）1　表 下　同　上　裏	豊前国仲津郡天生田村		豊前国仲津郡天生田村共有山字大将陣古墳中所獲　全形朽損多シ地銅其製薄キ地ニ模様ヲ打出シ総滅金ヲナス模様及ヒ金物図ノ如シ　長さ一尺八寸（其一）　図版1
20～21	同　上　表 同　上　2　側面			（其二）裏中程ノ寸，四寸五ブ裏惣金物アリ略ス　内側ニナル処左右トモ此間金物ナシ（部分ノ寸法ヲ示ス）図版2
22	銅　鏃　3	田川郡香春村	香春神社	田川郡香春村香春神社蔵
23	銅鏃など　12	阿波その他	神田氏	阿波出土8，不詳4
25	鐙，鐙鞦（みずお）1	仲津郡花熊村古墳	家　蔵	実測二分ノ一
26 27	鐙　1	京都郡苅田村	岡崎昌平治，鈴元鉄太郎	豊前国京都郡苅田村大字尾倉邑字八郎塚伝鎮西八郎為朝塚　三月十二日村祭アリ其塚ノ中　鎧　鉄ノ棒長四尺位　大力長四尺余　幅四寸位　同村岡崎昌平治，同村鈴元鉄太郎（朱書）
28～29	鉄輪鐙　1	怡土郡本村字牛畑	管（ママ）（菅）六郎	筑前国志摩郡前原村管六郎ノ蔵　福岡津田信秀氏所贈　二五年六月二十日　怡土郡本村字牛畑古塚ヨリ堀出ス　本図ハ実物ト同寸ニ描キシモノナリ
30～31	鐙　1	福島県石川郡	羽柴雄輔	福島県石川郡小山田村塚穴中所出之古鐙
32	鐙　1	出所不詳	松島氏蔵	
33	上，鉸具1　中，壺鐙1　下，鐙1		法隆寺など	上，和州法隆寺上宮太子鉸具　中，正倉院御宝物壺鐙　下，飾抄図鐙　軍器考
34	上，石馬1，左（？）1　下，瓦馬1	筑後国生葉郡，武蔵など		上，石馬筑後国生葉郡一条村　左，和州法隆寺所蔵　下，武蔵国埼玉郡上中条村発見
35	石　馬　2	筑後国生葉郡		石馬二個　筑後国生葉郡福島城趾
36	銅剣（戈）1		柏木氏蔵	二分一　図版4

頁	遺物名	出土地	所蔵者	記事
37	同上（戈） 右1，左1	仲津郡同郡天生田村	家蔵 ——	山名氏所恵　実測二分一　同郡天生田村横穴発見　明治二一年十月松田賢三郎持参写之二分一　図版4
38	同上（戈） 右1，中1，左1	——		右，下野足利駿阿寺開山御所持七首剣南蛮国神来作刃ノ全面長四寸幅中央四分　中，鞘（以下略）　左，鉄剣　シンガポール博物館（以下略）
39	鞘 右1，銅鉾 左1	田川郡糸田村		右，木製P.38左ノ木製鞘　左，銅鉾十二箇　明治三年田川郡糸田村土中発見
40～41	（銅戈拓影） 2		柏木（挿入分不明）	（銅戈一ふりの拓影を示す。さらに別の拓影を同頁にはさむ。前者には二三年四月九日写とあり。挿入分出土地、所蔵者不明。）
44～45	両刃剣 1	豊津村彦徳横穴	豊津鹿島氏蔵	豊津村大字彦徳横穴　惣長二尺五寸六分（以下略）
46～47	（鉄剣）上1（同上）下1	豊前国仲津郡	家蔵	上，豊前国仲津郡豊津村大字彦徳横穴（傍ニ木山横穴ト記入アリ）下，花熊塚穴　惣長一尺八寸二分
48～49	剣 2	不詳	松島氏蔵	出所不詳（拓影）
50	（刀装各種） 5	花熊村古墳	尾形	
51	（刀装各種） 9	天生田村古墳	守田	
52～53	石剣（石戈） 3		家蔵	内一個明治二二年六月神田孝平先生ニ寄贈ス　註10.
53	石剣（石戈） 1	徳力村	佐野径彦	豊前国企救郡石田村字明神土中発見，註10. 企救郡徳力村佐野径彦蔵
54～55	（有柄石剣） 1	遠賀郡中間字御楯（中間停車場近）	伊藤松延	右遠賀郡長津村中間神宮伊藤松延氏所蔵石剣側面及正面実大図，淡鼠色ニ黒色及淡卵色ノ斑文アリ質滑沢、　中間字御楯（中間停車場近傍）ノ溝中ヨリ掘出セリ，因ニ記ス御楯ナル名ハ斉明天皇西国巡狩ノ際ニ駐蹕セラレタルヲ以テ名ケタルベシ故ニ右石剣モ其当時ノ遺物ナラン　明治二七年二月二七日模写ス　二七年三月十日黒崎高等小学校教員二村鹿吉氏寄贈，中間村大八木某二男，（全長9寸8分5厘）図版3　註11.
56～57	石剣 1 同上 1	仲津郡豊津村台ヵ原2117番地 越後妙高山下	松島 玉江	仲津郡豊津村字台ヵ原二一一七番地内ヨリ出ス按スルニ元古墳ノ有リシ地ナラン，石質砥石ノ如クシテ堅シ色鼠色ニシテ青色ヲ帯此石及色共石器ニ多シ，図版4 天保丑甲午春獲之於越後妙高山下　雲華院主者玉江氏蔵
58	同上 2	那珂郡韓国	江藤宮本議官	筑前国那珂郡片縄村　人類学会雑誌第6号朝鮮慶尚道慶州半月城内（以下略）　同上10号
59	須恵器 2 石鏃 26	富野字大久保	家蔵	石鏃一富野字大久保外各地，内二個ハシーボルト「考古説略」ヨリ転写，須恵器拓影
60	石包丁 2	花熊村木山村	家蔵	豊前国仲津郡花熊村土中所獲　同国同郡木山村土中所獲
61	同上 2	木山村	家蔵	上，仲津郡同所土中所蔵　明治21年6月東京人類学会ニ寄付　下，同郡木山村土中発見
62	同上 2	嘉摩郡生葉郡	家蔵田代離三	筑前国嘉摩郡千手村土中発見4個ノ1　筑後国生葉郡大石村土中発見　生葉郡朝田村田代離三蔵
63	同上 3	大和，信濃，羽後	多治見，松林，大友ラ	大和国サミタヨリ発見，摂津住吉郡平野多治見治兵衛所蔵　信濃国佐久郡ヨリ発見，同国松本、松林清太郎所蔵　羽後国河辺郡御所野発見，同国南秋田郡楢山村大友道恒ノ蔵
64	同上 2	嘉摩郡	江藤正澄藤崎理三郎	筑前国嘉摩郡千手村発見スレート（2箇トモ）　千手村藤崎理三郎蔵

頁	遺物名	出土地	所蔵者	記事
65	石包丁 3	嘉摩郡，大和，アメリカ	藤崎，水茎	右頁64ニ同ジ　左上，大和国桧原京都北野平野神社祢宜水茎磐樟蔵　左下北米ウナラスカ島　東京人類学会雑誌掲載
66	同　上 3	アメリカ		（北米各地）
67	同　上 2	アメリカ 日　本		（北米，左三ハ雲根志第三所載分）
68	石鏃 2　石包丁 1 石剣 1	豊津村，天田村		石鏃　豊津村字山ノ神元国分村ノ内，同村字狐原　石包丁　天田村横穴，石剣　豊津村字台ケ原
69	石　斧 2	豊津村		上，豊津村用達所ノ前　下，同村国作分
70	縄文式土器　2			
71	石　斧 4	企救郡北方村城野村		2個　二二年六月二五日北方村ニ所獲企救郡ニテ石斧ヲウルコレヲ嚆矢トス　二個同年六月八日城野村四十塚ニテ拾之
72	石　斧 2	水町村	家　蔵	上、水町村ニテ二二年六月八日獲之　下，城野村四十塚ニテ二二年六月八日
73	石　斧 1	田川郡	家　蔵	田川郡夏吉村字萩原（右四個家蔵トアリ P.73，72，71下ヲサスカ数不合）
74	石　斧 1	鞍手郡		筑前鞍手郡下木月村貝塚
75	石斧　2　土器　2	肥後国八代郡	加来熊次郎	肥後国八代郡吉野村貝塚石器及陶器破片加来熊次郎所有同氏拾得
76	石　斧 1	仲津郡	松　島	豊前国仲津郡豊津村小字フキ谷桑畠開墾地ニ出土，此地旧時同郡花熊村ニ属スル処，（形，石質，色，寸尺ヲモ記ス）
	石　斧 2	豊津村		右，豊津村字狐原　左，豊津村富貴谷
77	同　上 3	築城郡 企救郡	家　蔵	上右，築城郡角田村発見　上左，企救郡北方村発見　下，企救郡北方村発見
78	同　上 4	企救郡	家　蔵	右・右下・左下，企救郡城野村字四十塚左，同郡水町村字高坊
80	（三角縁神獣鏡）　1		宇原神社	（拓影）（石塚山古墳，吾作銘四神四獣，広島・大阪・京都の古墳と同笵鏡あり）図版8，註12，13，14.
81	（三角縁神獣鏡）　1		自 慊 堂	（拓影）図版6
82	（変形四神鏡？）　1 （細線式四禽鏡）　1		自 慊 堂	（拓影）図版7
83	（流雲文帯尚方作銘細線式獣帯鏡）1		柏　木	（拓影，後漢代前半）図版7
84	（高麗鏡？）2		家　蔵	（拓影，下　六獣鏡）
85	湖州鏡 9（P.93マデ）	企救郡	太祖神社（御祖）	古鏡 9 面　企救郡足立村太祖神社蔵　寛政七卯年四月十日同社境内土中所穫（以下九面拓影P93マデ。小倉北区）
86	同　上		同　上	（同上二面）
87	同　上		同　上	6　湖州真石家上等昭子記
88	同　上		同　上	呈立妙見大寺御宝前　右者為在原熊市目病消除明鏡安楽也□女市子宇佐氏□生也□□□　承安三年二月敬白
89	同　上		同　上	
90	同　上		同　上	
91	同　上		同　上	
92	同　上		同　上	湖州儀鳳橋酒楼相対石念二叔男念七郎鏡
93	同　上		同　上	明治二三年十月二九日写

頁	遺　物　名	出土地	所蔵者	記　事
97	(和　鏡?) 2		家　蔵	下、家蔵
98	(和　鏡) 1	企救郡		安徳帝御物ノ由言伝　企救郡隠蓑某寺蔵明治十二年十二月二七日謹写(拓影)
99	同　上 1		家　蔵	
101	(三 輪 玉) 3		家　蔵	右1，何物ナリヤ知ルヘカラス仲津郡木山村古墳中数多之レヲ出タス家蔵(左2，日本石器考所載)図版10左
103	(紡 錘 車) 2	仲津郡	家　蔵	上，豊前国仲津郡花熊村馬岳古墳　下，同国郡豊津
104	(同　上) 4			「日本石器考」所載
105	石碑(板碑) 1	企救郡		企救郡水町村字高坊ニアリ土俗升冢ト云康永二癸未年ヨリ明治二三年迄五四八年幅一尺六寸五分(康永二年)図版12.
106～110	(由来・伝説文)			(同上ノ由来オヨビ伝説ヲ記ス)
111	同　上 2	武蔵国	竜福寺，総泉寺	武蔵国豊島郡小豆沢村竜福寺墓地　同国同郡浅草橋場総泉寺境内
112	同　上 1	武蔵国	浅草寺	
113	同　上 5	武蔵国		
114	同　上 2	武蔵国		武蔵
115	同　上 3			御宇多帝御宇将軍惟康親王以下三碑
116	同　上 4			御柏原帝御宇将軍足利義植以下四碑
117	(板碑，石塔) 3			亀山帝御宇将軍宗尊親王以下二　範頼石塔
119～120	(板　碑) 1	宇佐郡	佐田神社	宇佐郡佐田村佐田神社境内ニアリ祭神武内宮跡　二六年一月三十日加来重信君寄贈(元弘三年)
121～122	埴輪破片　2	企救郡		豊前国企救郡曽根村字中曽根荒神山古墳発見埴輪破片
127～128	土　偶 1	陸奥国亀岡	野呂武左衛門	陸奥国西津軽郡飯岡村農野呂武左衛門蔵
129～130	同　上 1			陸奥弘前佐藤蔀原図　羽前霍岡羽柴雄輔再図
131～132	(飾瓦?) 6	陸奥国中津軽郡	山谷藤四郎	高杉村岩木山の東麓　同人云先年檐下ヨリ得ルト云　此物最古物ニシテ其材ハ瓦ト見ユル也　黒色ニシテ裏淡白也
133～134	土　偶 2	陸奥国亀岡	佐 藤 蔀	土中所出ノ土偶写　序ニ云亀ケ岡ノ亀ハ瓶字が正字ナリ原形色茶光沢アリ　原形色ハダ黒シ
135～136	同　上 2	同　上	同　上	西津軽郡亀ケ岡土中所出ノ人形破片　色黒ク光沢アリ
137～138	同　上 2	同　上	野呂忠吉	土性精細全体黒色
139	亀岡式土器　1	陸奥	松森又次郎	
140	土　偶 1	羽前国東田川郡	淡崖先生	羽前国東田川郡清川村
141～150	(石器各種) 9	下野国	鎌　伊	九点　石棒　独鈷石ナド
231	(鉄　矛) 1	仲津郡木山		目釘残レリ
232	同　上 1	同　上		
233	鉄　鉾 2	京都郡興原村		京都郡興原村番塚(註2)
234	同　上 2	同　上		

頁	遺物名	出土地	所蔵者	記事
235	(鉄鉾) 6	尾州神戸村		「集古十種」所載尾州神戸村
236	同上 3			正倉院御宝物御飾「軍器考」
239～240	鉄鏃 10 2	仲津郡花熊村ナド		十点ハ仲津郡田川郡花熊村古墳中発見　二点ハ上毛郡唐原古墳
241～242	(組合式箱式石棺？)	京都郡		京都郡入学村字見立掘内乙　邸内地ヲ掘テ出ル処ナリ（底石ナク土床太刀陶器等アリ蓋石4枚）
243～244	和鏡 1			慶長十七年大願主細川越中守源朝臣忠興
245～246	同上（裏面）		(守田氏？)	守田氏
247	石鏃 2	飛州		小川君之恵送
249～250	史前器（加曽利式土器）1	神奈川県		史前器,「東京人類学会雑誌」第4巻第34号113頁 神奈川県武蔵国北多摩郡蔵敷村字台土中発見
251	鍔 4	仲津郡	家蔵	仲津郡中古墳発見　図版5
252	同上 6	下野国		下野国足利有志町公園内古墳
253～256	斧（鉄斧）4	仲津郡		
259	斧（鉄斧）2	三潴郡		筑後三潴郡宮本村古墳　筑後古塚遺物縮図久留米矢野一貞、村上量敏著
260	鈴 3	田川郡		田川郡香春神社　二一年五月二十写
261	(石誌拓影) 1			
262	(貝製腕輪) 1	仲津郡		仲津郡竹並村古墳　貝器五個内二個東京人類学会ニ寄附　（註3参照ゴホウラ製）図版9
263	(同上) 3	仲津郡		仲津郡天生田村横穴（註3参照、イモガイ製）
264	(同上) 1		シンガポール博物館	シンガポール博物館マレー人種服飾品陳列所ボービー島土人ノ用ヒル腕輪（註3）
265	石鏃 4　曲玉 2	フランスなど		（石鏃ハフランスなど出土曲玉ハ翡翠、銅内空出土地不明）
266	(五鈴鏡) 1		(守田氏？)	二三年四月写　守田
267～269	鈴 2	仲津郡		仲津郡天生田村字大将陣古墳
270	鈴 5	企救郡 仲津郡	佐野家蔵	企救郡石田村農家所伝一　仲津郡出所不詳一　同郡花熊村古墳三
271～272	(不明銅器) 4	城野村		城野村大字隠蓑　質銅ノ如シ4個ニテ量目五八斤中西甚兵衛屋敷床ノ下三寸余ノ土中ヨリ出ス　二四年十一月二日甚兵衛掘出ス
273～274	法華寺鐘楼ノ瓦 1 その他	法華寺		（拓影軒丸）其ノ外金沢文庫、東大寺瓦ノ拓影各1）
275	瓦拓影 1			（拓影軒丸）
276	都府楼瓦 1	都府楼		（拓影軒丸）明治十六年太宰府参詣途次同地ニテ獲之
277	国分寺古瓦 1		松島	（拓影軒丸）
278	弥勒寺古瓦 1	弥勒寺		（拓影軒丸）
279	国分寺古瓦 1	仲津郡	家蔵	（拓影軒丸）仲津郡国分寺古瓦
281～282	(平瓦) 1	都府楼	家蔵	（拓影平瓦）太宰府町明治二六年七月，手嶋重三郎二六年七月二二日見ル古瓦
285～286	(縄文式土器2，猪牙3)	鞍手郡下木月村		右ハ明治二一年十二月五日鞍手郡下木月村字貝売畑ニテ理学士坪井正五郎ト共ニ獲ル所ナリ

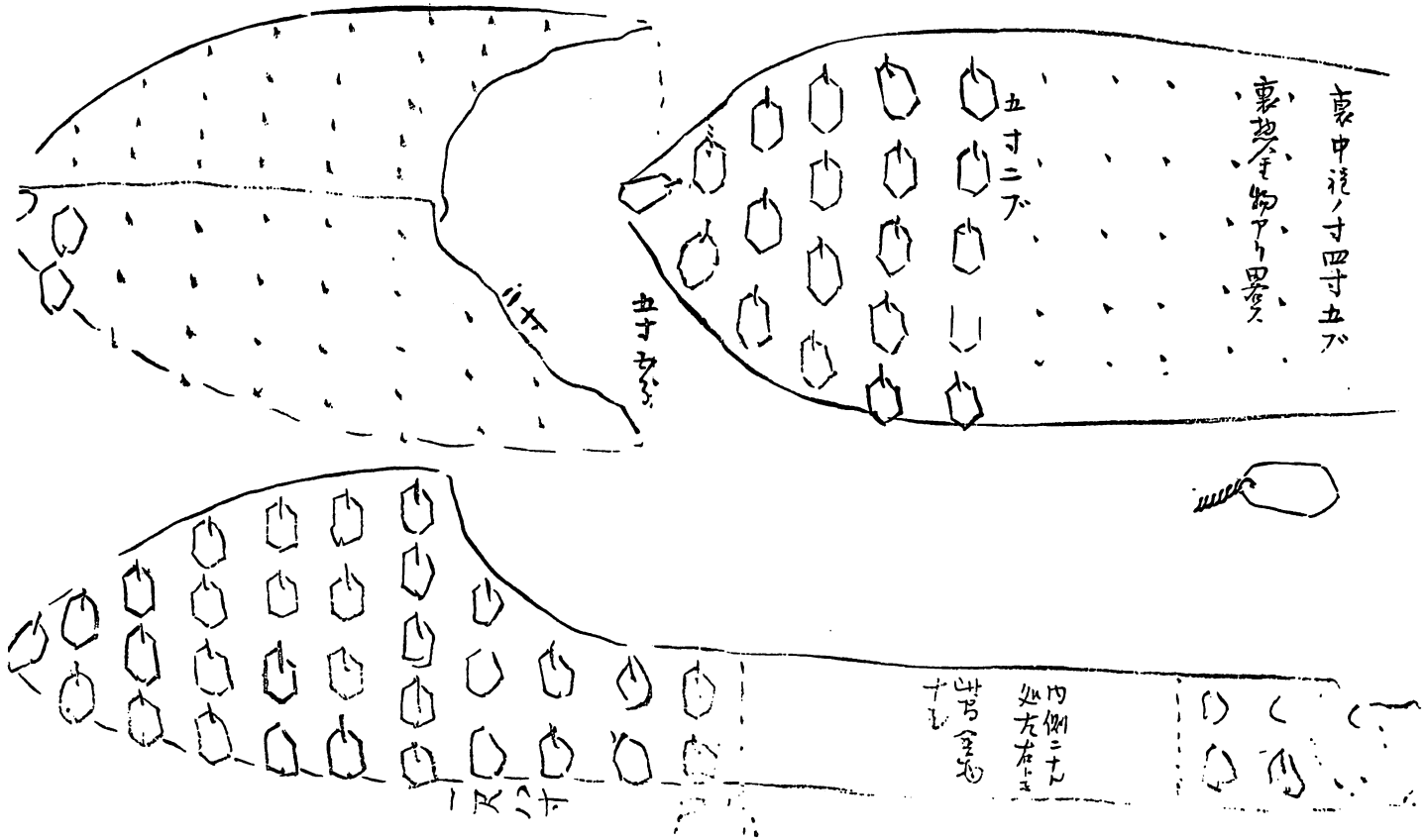
頁	遺　物　名	出土地	所蔵者	記　事
289	(銅製壺) 1	田川郡伊方村	香春警察署	田川郡伊方村土中所出　明治二一年五月二一日香春警察ニ於テ見ル，銅ニ鍍金シタルモノナリ
292	(須恵器各種) 1	仲津郡木山	柏　木	
293	(同　上) 1	仲津郡花熊村	家　蔵	仲津郡花熊村塚穴
294	(同　上) 2	仲津郡	同　上	同郡天生田村，木山村
295	(同　上) 2	(仲津郡)	?	
296	(同　上) 4	同　上	?	
297	(同　上) 3	木山村など	?	木山村塚穴　城野村字シゲスミ塚穴　花熊村
298	(同　上) 3	仲津郡天生田	?	仲津郡天生田横穴　大和　出所不詳
299	(同　上) 3	同　上	柏　木 家　蔵	天生田横穴
300	(同　上) 4		柏　木	質赤
302	(同　上) 4	仲津郡，京都郡，企救郡		仲津郡，京都郡、企救郡藍島塚穴　明治二四年五月二四日同処ニテ獲之
303	(同　上) 5			
304	(同　上) 2			
306	(同　上) 2			
307	(同　上) 3	仲津郡豊津		仲津郡豊津
308	(同　上) 2			
309	(同　上) 2			
310	(同　上) 2			
312	(同　上) 1	田川郡		田川郡夏吉村字糸飛
313	(同　上) 1	田川郡		同　上　横穴
314	(同　上) 2	京都郡，企救郡		京都郡　企救郡城野村字シゲズミ古墳
315	(同　上) 1	田川郡		田川郡夏吉村字萩原横穴
316	(同　上) 1	京都郡	松　島	京都郡谷口村塚穴
317	(不明拓影) 1			
318	(須恵器各種) 2	京都郡	家　蔵	京都郡谷口村
319	(同　上) 1	田川郡	同　上	田川郡夏吉村字糸飛
320	(同　上) 2		古賀仙平 家　蔵	
321	(同　上) 1		家　蔵	
322	(同　上) 1			
323	(同　上) 1	天生田村		出所天生田大橋村坂
324	(同　上) 1		家　蔵	出所不詳

頁	遺　物　名	出土地	所蔵者	記　事
325	(須恵器各種) 1	天生田村	柏　木	
326	(同　上) 1			
327	(同　上) 1		柏　木	
328	(同　上) 1	天生田村	同　上	天生田村横穴
329	(須恵器拓影) 1			(拓影)
330	(同　上) 1		家　蔵	
331	(同　上) 1	天生田村	柏　木	天生田村横穴　小豆色薬
332	(同　上) 1	田川郡	家　蔵	田川郡上伊田村古墳
333	(縄文式土器) 1	岩代	大塚又兵	岩代桑野　大塚又兵所蔵並原図古香再図
334	(須恵器各種) 1	天生田村	坂井新蔵 古賀仙平	天生田村横穴　表布目裏渦文
335	(同　上) 2		柏　木	質赤
336	(同　上) 3		尾形，柏木	仲津郡彦徳村横穴，大橋村尾形氏，柏木氏蔵
337	(同　上) 3	天生田村	家　蔵	天生田横穴　土質赤　明治二四年五月
338	(同　上) 3	袈裟丸村，天生田		袈裟丸村　天生田横穴
339	(同　上) 1			
340	(同　上) 4	天生田村 伊勢、備前		天生田村横穴　備前　勢州桑名郡蛎塚村
341	(同　上) 2	山城	田　口	山城国木幡山所掘得，「梅園奇賞」所載
342	(同　上) 4	肥後、讃岐，土佐		讃岐国山田郡上田井村，由良古甕　肥後国山本郡内村横穴　土佐国長岡郡南部塚穴
343	(土　器) 5	筑前，伊勢、駿州	江藤正澄	筑前怡土郡三床村　伊勢桑名郡蛎塚村　駿州静岡村近在
344	(須恵器各種) 3	田川郡，仲津郡ナド		田川郡宮尾村塚穴　企救横代村塚穴　仲津郡羽根木村字古屋鋪
345	(同　上) 2	志摩郡，怡土郡	磯野七平 江藤正澄	筑前国志摩郡某村古墳　同国怡土郡東村古墳　図版11.
346	(同　上) 1	土佐		土佐国長岡郡南部塚穴　中央直径六寸深五寸
347	(土　器) 4	豊後大分郡		豊後国大分郡富岡村富岡川　右4箇土器友人某寄贈
348	(土器・曲玉・石七) 8	豊後大野郡，琉球		大野郡長畑村大字小切畑畑中ヨリ出ル戸伏某採集（ソノ他同郡中井田村ナド，曲玉ニ沖縄ノモノアリ，紙片貼布）
350	(須恵器各種) 11	伊勢，相模，下野		野州宇都宮神社ノ後ヨリ掘出ス　9箇駿州静岡近在　伊勢桑名郡蛎塚村
351	(同　上) 3		柏　木	土質赤
352	(同　上) 6	下野、朝鮮		下野国足利有志町公園古墳，朝鮮出
353	(同　上) 2	朝鮮	宮　本	朝鮮慶尚道慶州半月城内羅朝宗廟墟　宮本議官所蔵
354～358	(同　上) 15	下野，仲津郡	家　蔵	家蔵（14個ハ下野国那須郡　1個ハ仲津郡彦徳村）
359	(同　上) 2	仲津郡	尾形，家蔵	(内1ハ家蔵) 仲津郡花熊村塚穴大橋村尾形氏蔵

頁	遺　物　品	出土地	所蔵者	記　事
360	（環頭・雲珠・曲玉） 4	仲津郡，田川郡	福島，尾形昌三	環頭　田川郡彦徳横穴出土福島蔵，曲玉　仲津郡大村本陣塚穴尾形昌三蔵内 1 個天生郎田，雲珠　田川郡金川村字平塚古墳進孝次ヨリ存贈　図版 5
裏見返	（古 印 影） 1	?		（真□寺印，註 9 参照）図版13，写真 1

第 1 図　金銅製履（P18～19）

第2図　金銅製履（P20～21）



右遠賀郡長津村中間神官伊藤松延氏所藏石劔側面及正面實大圖

淡鼠色ニ黑色及淡卵色ノ斑紋アリ質滑澤

中間字御楯(中間停車場近傍)ノ溝中ヨリ堀出セリ

因ニ記ス　御楯ハ名ハ齊明天皇西國巡狩ノ際ニ駐蹕セラレタルヲ以テ名ケタルベシ故ニ右石劔モ其當時ノ遺ナラン

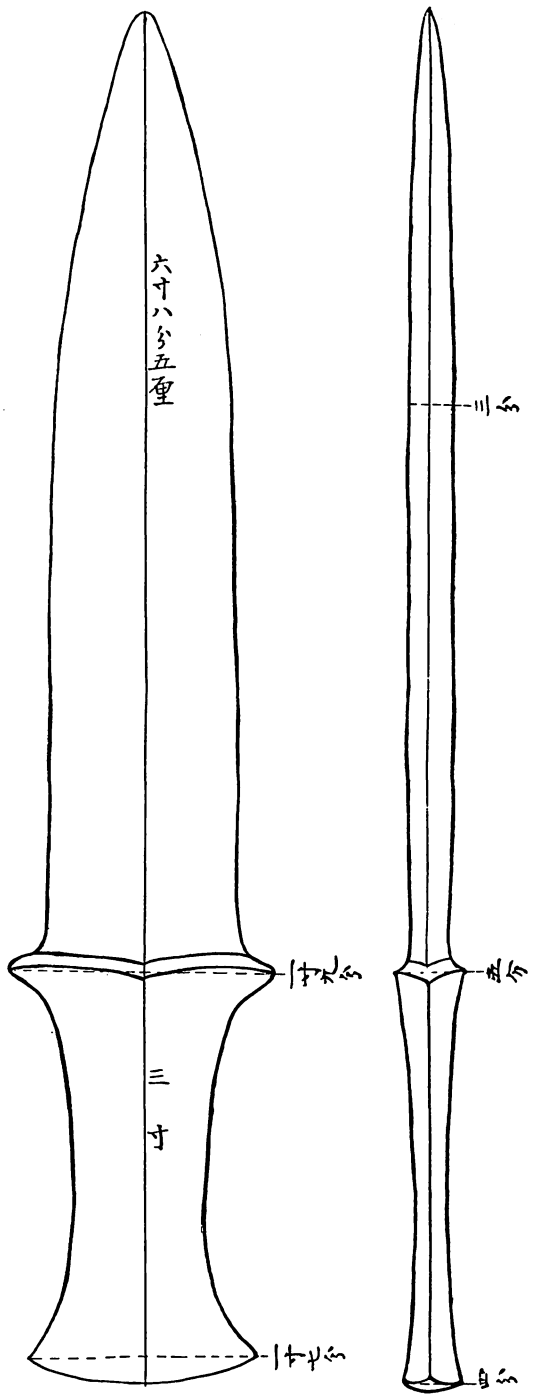
明治廿七年二月廿七日摸寫ス

黑崎高等小學校教員

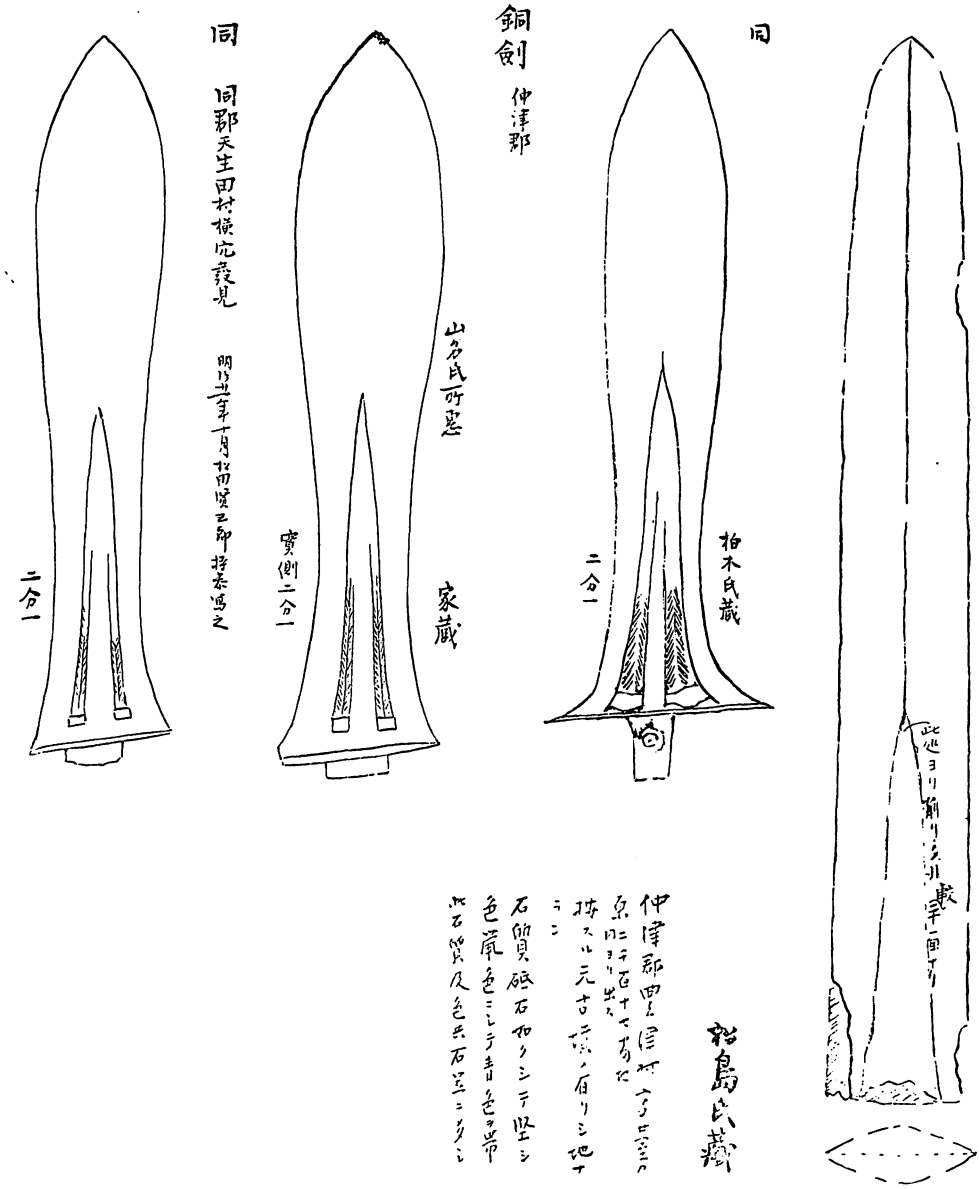
二村鹿吉氏寄贈

廿七年三月一日

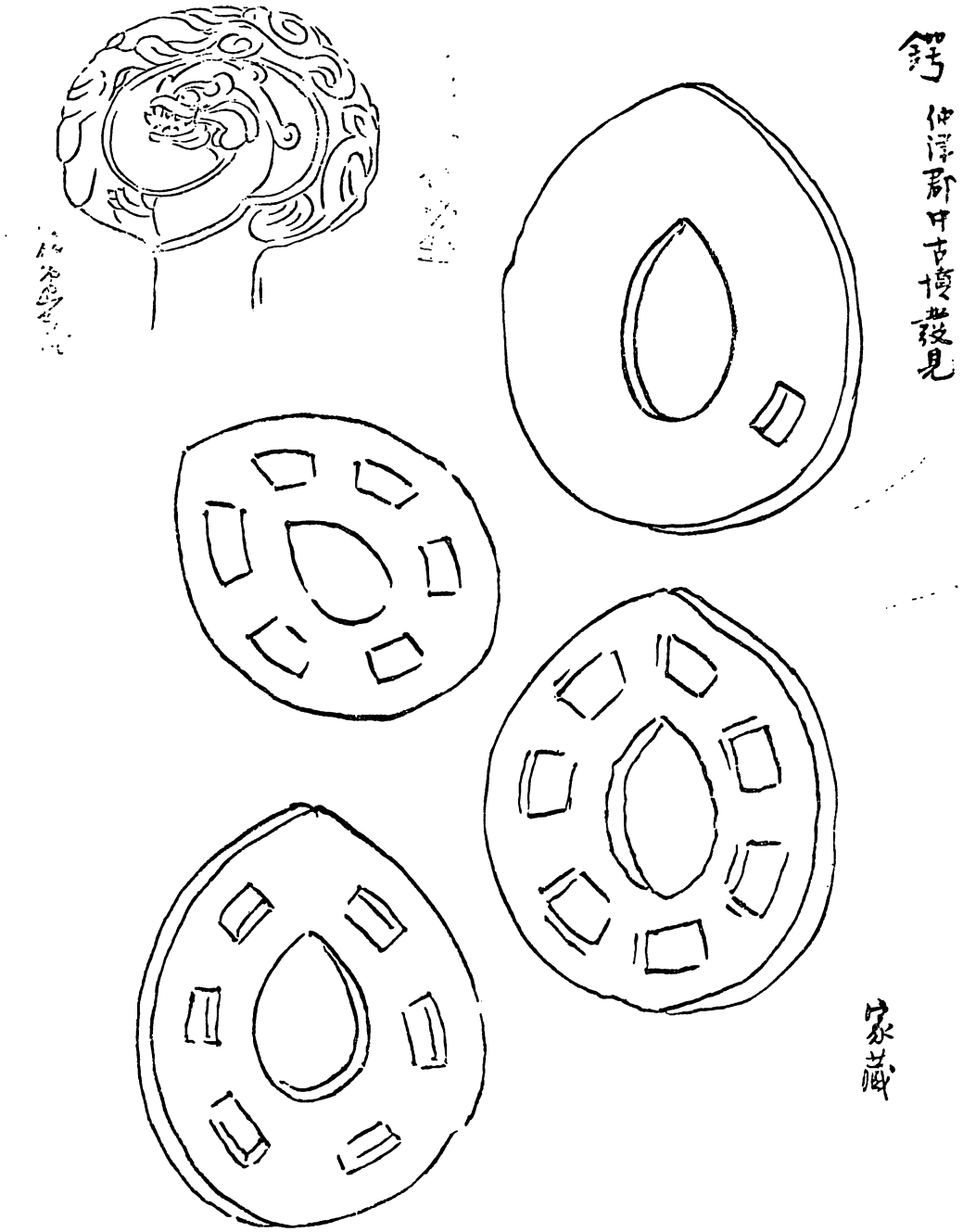
中間村大八木某ニ與



第 3 図　有 柄 石 剣 (P54, 55)

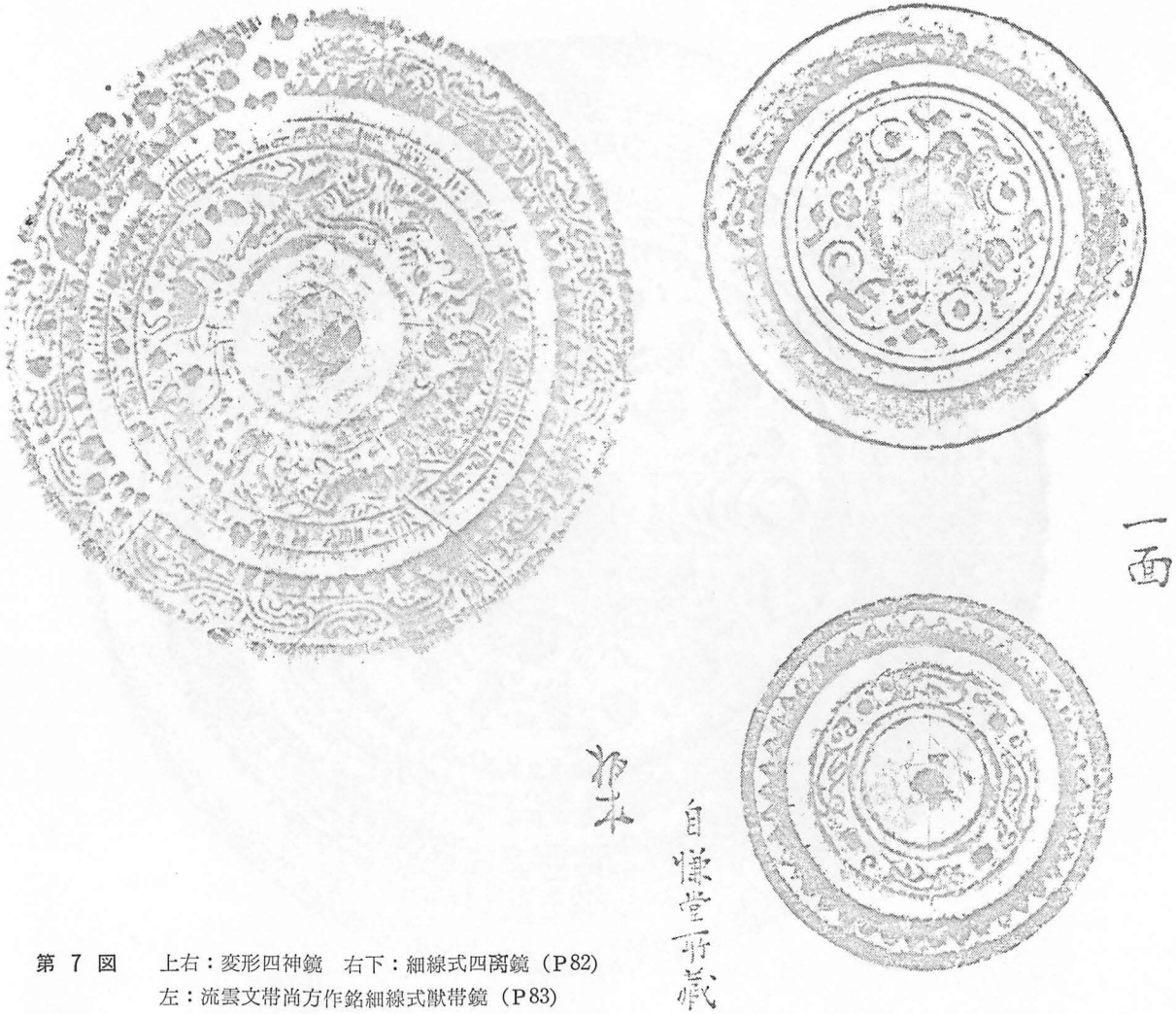


第 4 図　左 銅戈（P36, 37）右 石剣（P56, 57）



第 5 図　鐸（P251）環頭（P360）

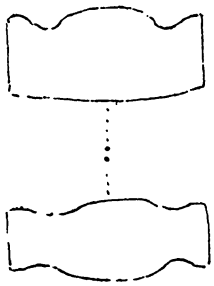
第 6 図　三 角 縁 神 獣 鏡 (P81)

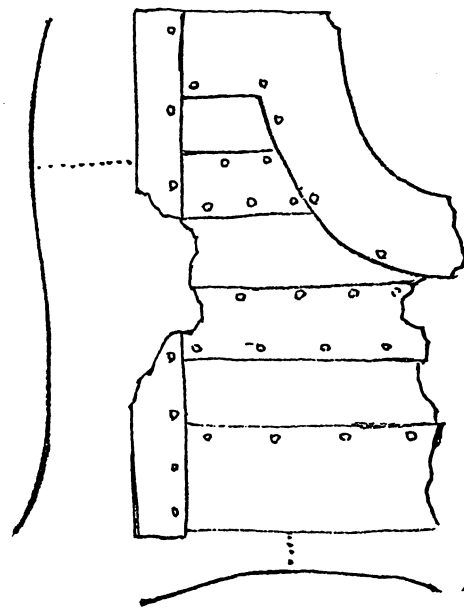


第 7 図　上右：変形四神鏡　右下：細線式四禽鏡（P82）
左：流雲文帯尚方作銘細線式獣帯鏡（P83）

第 8 図　三 角 縁 神 獣 鏡 (P80)

第9図 貝製腕輪（P262）





家蔵

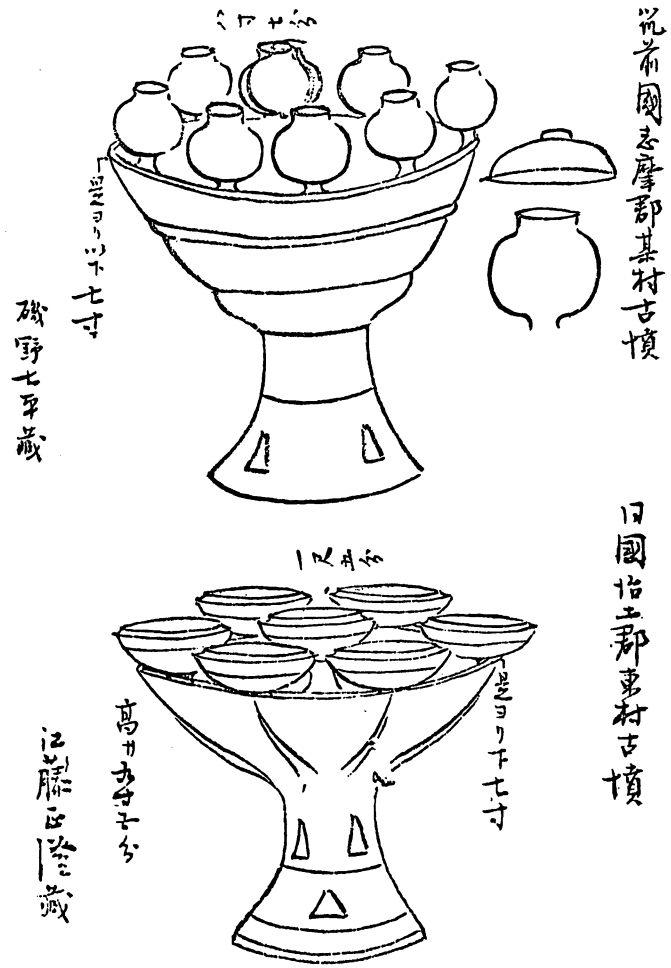
何物ナリヤ知ル一カラス
仲津郡木山村古墳中数多之ヲ出タス

家蔵

其四
甲
仲津郡花熊村

第10図 短 甲（P 3）三輪玉（P101）

第12図　板碑（P105）



第11図　須恵器（P345）

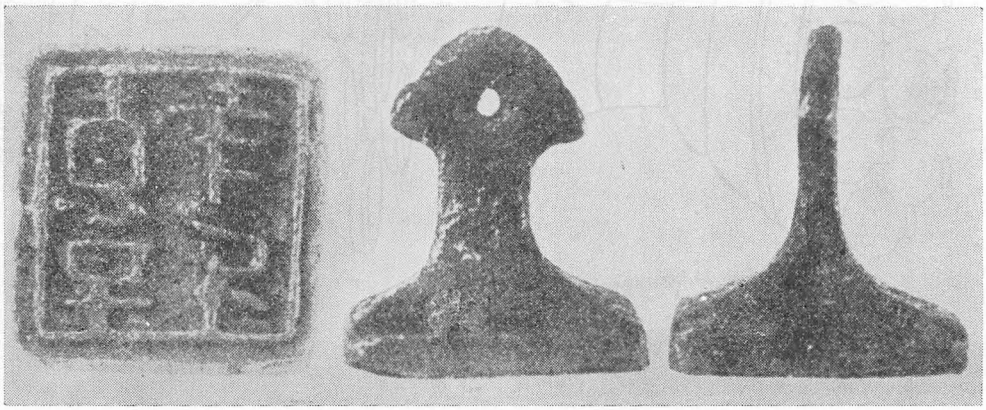
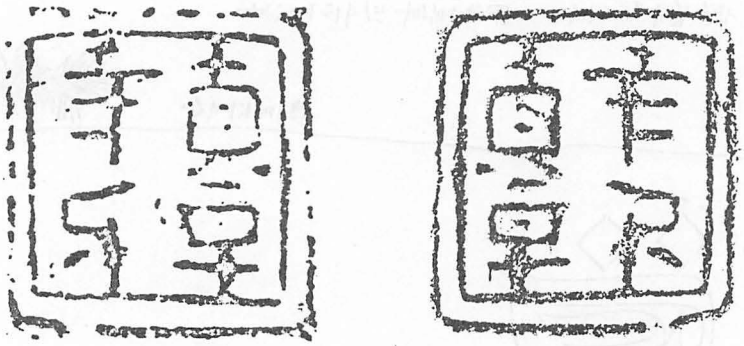


写真1　　真□寺印（註9書より）



1　　2

第 13 図　真□寺印（1印影　2拓影）

槇の園ひろよし（花押）

嘉永四季春写之小金丸種徳

貝鐘の音も聞えず
　皇神の国ぶり
　　しるき
沖つしまかな

此歌種徳（後平野次郎国臣ト称）カ瀛嶋ニテ咏メルナリ

此防人日記は、故平野国臣（小金丸種徳ト称シキト）手写セルナリ。

嶋をさ、みなと近き家をえらびて盃取出てあへす。爰より別船に移り乗て、申の時志賀嶋に着たり。皇神に参りて、海つ路のやすけかりしをかへりまうしす。御前をまかる時、うなばらを見渡しつゝ、

ゆくさくさみれどもあかず打あげの浜のありそによする白浪

志賀か蜑の塩焼衣、又、和布苅塩やきなどこそ、いしへ人はよみたりしに、今は塩はやかず成ぬ。その塩やきしあとは、御社の東、打昇の浜につゞきたるところ也。こよひは此嶋にやどりぬ。

同四日。けふなも福岡につくとて、人々ほのぐらきに起出て、物ら打かたらひ、たはぶれわらふ。故さとの近づくを悦びて、つねよりも心かろき成べし。船の来るほどとて、髪のわゝけたるを梳り、衣などとりて着かふとて、

崎守の肩にまとひし鹿ごろもなれて中々かへうかりけり

日ごろはうしとながめしやへの塩路も、けふをかきりとおもふには、心のこりてうしろねたくたちいで、巳の時過るころ船にのりて、満潮に帆ひきたれば、立はしりわたりたらんやうにて、午の時にはつきぬ。爰は、さきに船乗せし荒津崎の西の磯也。とかくするほどに、家人も友人も、聞つけてむかへにくる人のよめる。

秋風に帆を引つれてわが背子が雁よりさきにはやく来ませる

とよみたり。いといたうめでゝよめるうた、

わが背子が深き心をあらつ崎みつ潮海にたぐへてぞみる

かくて、かへりごとまうしにとて、家にかへらずして、直に国の殿にまゐる。日も山端にかくれなんとするほど、家に帰り着ぬ。庭をみれば、わがゆく時は、池の藤浪のやゝ長く垂て、今五日・六日ばかりも在まばば、などおもひつゝ出立しを、其日頃経る迄はわすれがて成しを、今見れば、花の咲つらんとおぼゆるさまもなくて、下葉のやゝ色付にける、わづか四月・五月のほどに、春と秋とのうらうへなる世のありさまは、あまたの年経たらんやうになもおもはる。されども家の内は、うからやからつどひて、いとにきびにしかば、かたみによろこびあへる。いろせに見すとて

秋くれば草はみなからうつろへど吾背の君はいやさかえます

ちかきあたりの人など訪ひ来る。盃とりかはして、更行までうたひまふ。浪風のおどろ〳〵しきにはやうかはりて、うつばりの塵もちるばかりなり。

藤田正兼大人云。吾うつせし本書におく書あり。年号干支はなし。とし道ひろよしともに誰人ともしらず。

奥書

これのふみは、此つくしの国の殿に仕へ玉ふ、瑞枝さす青柳主の宗像のおきの嶋に防人にまかり玉ひし時の日記なるを、さくら井の平川千淵のこひ受てうつしとり物せられしを、吾友とし道かの千淵の子千春に請うけて吾にも見せつ。唯よみしまゝかへさんもくちをしくて、手あしきをもかへりみず、写しとりしになん。

比こゝに取いれたり。其彫れるさまいと工なり。その手も勝れたりとぞ。二町ばかり田島村のかたはらに清水有て、御炊ノ水といふ。かたはらに碑たてり。天真名井をうつせしよし記せり。けふもいとあつければ、御社を出で、前なる家に入て破籠など取出して、しばし休みて、江口川の橋を渡り、吉田の鎮国寺にまうづ、御社に五六丁ばかり東北の山に、昔は大なる寺成しと見えて、畠の字に子院の処多く残れり。此寺、亀山天皇の弘長（一二六一～六三）の頃、宗像長氏建立して定額寺とし、皇鑒といふ僧を住しむ。文永二年（一二六五）の比、太政官符宣あり。又田嶋村に大宮司の館趾あり。あるひはこの村の内の山岸に、楢葉の紋ある石あり。これを割てみれば、枝葉鮮かにしてその紋悉く隠化、楢の樹の年経て化たる成べし。宗像氏の家の紋三ツ柏なるが、おのづから肖たりとて、神紋石となんよびて、世にもてあそぶ人多し。

神の代にさかきにとりし楢のはのかたしはとさへなるがあやしさ

かなたこなた見めぐるに、日も西にかたぶきぬればとて、勝浦より船乗して、勝嶋近く漕たみて大島に帰りぬれば、ともしさす頃になりたり。今宵、河野ぬしがもとよりつかひ来りて、しゐて率て行き、杯とりかはして、いにしへの事など物語るに、あるじ日本紀をよめとて、せちにこふ。けふし朝とく田島に行て、日ひとひあそびくらしつれば、夜ふくるにつけていたうつかれぬれども、もだしがたく、神武の御巻のはじめのほどをなん、いさゝかよみ（て）やみぬる。

同二日（八月）。大島の北のかた、御浦といふ所に物す。こは里より十八町あなた、岩瀬の西に、沖つしまにむかひておくまりたる入江あり。其江の西にさし出たる岩崎を、神崎と云。磯の岩村に大なる馬ノ蹄の址あり。又、人の足跡なる小き数多あり。彫たるが如し。潮干ぬれば見ゆ。波かぞへて、かなたこなたの岩角に、はしりあるきてみるに、寄浪あらき所にて、朝夕うちはふるにも消ずして、かくさだかにのこりたるは、いとも〳〵奇しきこと也。爰なん、宗像の神のはじめて来着玉ひし所といふ。風土記に崎門山といへるは、こゝのことにや。

吾もみつ人にも告ん宗像の皇御神の踏しあと所

後の代にいひつぐがねと皇神の御あと所しかしけらしも

岩の上に土と踏なし万代に神さびいますこれのあとどころ

あらいそのゆつ岩むらに残るあと今のをつゝに見るがあやしさ

磯山の上に窟あり。高さ深さ壱丈ばかり。窟の内左右の石壁に文字あり。消て見えず。いかなることを書たるにか。又、此崎の東海の岸にも大なる岩窟あり。爰にも文字を彫たれども見えず。近き頃この嶌に鯨をとる。その脂を煑る（とて）、爰の岩を多く割とりて竈の構へにせり。其矢をいれしあと多し。かゝる神地をも憚ることなく物するは、いやしき蜑のしわざながら、いとかしこき事になもある。

同三日（八月）。朝まだきに船を出して、阿閉嶋をおふ。午の時斗につく。

皇子命を生玉へり。此よすがにして朝臣を賜へりしなるべし。を賜はれり。此氏人当郡に多くありて、郡領に叙し、そのうちいさぎよき人を選て、此社の神主とし玉ひて、従五位に叙せられしこと、続日本後紀等に見えたり。中頃までも、宗像氏に二人の大きなる勢ひの人有しこと、宗像記にいへり。大宮司の家一人となりしは、いづれの比のことなりしにか。尊氏都を追出されて、纔の兵を率て此国に落下られし時、大宮司氏俊力を添て、遂に筑紫の軍兵を起して、京を傾け奉りし事、そのをりの書どもに見えたり。これよりひたすら武士の如くなりて、ます〳〵富栄えぬ。大かた、氏俊の時よりや、一人のかたはおとろへけん。今宗像氏に伝ふるには、延喜天皇の子に、清氏といふ人あり。此人、大宮司の曩祖にして、近代氏貞迄七拾九代祭祀を掌りしといふ。いとも〳〵いぶかしき事也。延喜の御時より天正の比まで、七拾九代経たりといふは、一人の世餘りに短くして、いかにぞや聞ゆ。思ふに旧事記に、吾田片隅命の弟に健飯賀田須命あり、此人は大田々祢古命也。これ大神氏にして瑞雛宮天皇より正親町天皇まで九十八代経ぬるれば、宗像の七拾九代は、大かた此間の事にして、清氏といふは、吾田片隅命が、その御子あたりを伝へ誤りしならん。清氏といふ人、物に見えたる事なく、延喜の皇子にはおはしまさぬをや。

田島社の南、山上に高宮といふあり。相伝へて清氏の墓也と云。寛永年中、社再建の時地を引て石棺を得たり。開てみれば其内に骨あり。朱にて埋たり。太刀・弓矢等も有しと云。いまは此社を田島の社内に移せり。又下高宮あり。是ハ宗像氏世々の内室をまつる社也。これは近比社内にうつせり。

凡、家々の伝説には私言多くして、やゝもすれば皇孫と名のりて、尊氏と認る事、世々の史にもみえて、上代にもこれを偽り犯せしこと多し。まして源平の比は、武士の伴王氏を出て遠からずといふ事を、家の光とせしことなりしかば、宗像朝臣をも、皇孫ならぬ事を物げなくおぼえて、かの源氏と等しく、人にも誇らんとて、自ら延喜の皇子の裔也といひし成へし。此御社をも、古は八幡宮とさへ申奉りしぞかし。[*140] 八幡大神は軍神にまして、源氏の人々をはじめとして、武士のいたく重みし奉るによりて、絶て此社にもあらぬ御名を負せ奉りし也。これらをおもふに、いよ〳〵清氏の延喜の皇子ならぬことしらる。氏俊は其身社に仕へながら、朝敵尊氏に与して、其後裔は、又、氏の祖をさへ、あらぬ事に物せられしは、いと罪深くいひかひなきこと成べし。氏貞に到りて、さばかりの旧家を跡なく滅されしも、ひとへに大神の怒りおもほせしもの也。允恭の御世の探湯のことをおもはざるこそ、氏人大きなる過ち也けれ。[*141] 天正の次までは、宮人七拾余人ありしが、今わづか十三人になれり。[142] 此うち深田氏二人嶺氏一人は、何れも宗像朝臣にて、昔の大宮司の族也といふ。御社の側に、弥陀石像長四尺八寸横厚九寸あり。[*143] むかし平内大臣重盛公、宋国の育王山に沙金二千両を送らる。内大臣薨玉ひて後、かの寺僧、大蔵経と襄陽にありし隋の陳仁稜が書たる弥陀経を模して、石仏の背に刻て贈れり。其船、神の湊のかたはし、江口といふ所に着ぬ。既に此時平氏亡びたるあと也しかば、これを受入る人なし。宋人せんかたなくて、大蔵経を此社にこめ、石仏を江口のほとりに建置て帰れりといふ。近

左辨官下　太宰府

応且任国司庁宣旦依往阿弥陀仏勧進状、宛用管筑前国宗像社修理用途、同国曲村田地肆拾町事、

右得彼社神官等、去月日解状�、当社者、天照大神降来之霊地、日域无双之仁司也、仍被レ寄二附料田一、勤二行弐日之神事一、但於二大少七十余社之修理用途者、往古以来、以二葦屋津新宮浜漂濤之寄物一、致二沙汰一、送二数百歳之星霜一、而今往阿弥陀仏、哀二彼漂濤之難一、築二孤島一、助二往還之船一、休二風波之煩一、因茲修理用途、已以二无足之由一、以二関東状一、経二国司一庁宣奉畢。望請二鴻恩一、以曲村為二社頭御修理一、沙汰之旨賜二官符一、欲レ備二後代之亀鏡一者、権中納言藤原朝臣宣、奉　勅依請者、府宣承知、依レ宣行レ之

寛喜三年四月五日（一二三一）　大史小槻宿祢（花押）

小辨藤原朝臣（花押）

永寿元年（一八二）の御綸旨にも、孤島を築くよし見えたり。又、曲村（まがりむら）賜るよしの延慶（一三一〇）の院宣あり。次に載たり。此往阿が事は、続日本紀の神護景雲元年（七六七）のところに見えたる、宗像朝臣深津（ふかつ）が、僧寿応にすゝめられて、金崎の船瀬を造りしに似たること也。

筑前国宗像社修理料所曲村事、任二寛喜宣旨如レ元所レ被二返付一也。可レ令二存知一者。院宣如此。悉之以レ状。

延慶三年八月十五日

大宮司館

また文書、

左辨官下　太宰府

応下知管筑前国、除高時法師党類以下朝敵与同外諸国輩、当時知行地、不可有依違事。

右大納言藤原朝臣宣房奉　勅、兵革之後、士卒民庶未二安堵一。仍降二絲綸一、被レ救二牢籠一、而万機事繁。施行有煩、加之諸国之輩不レ論二遠近一、悉以二京上一徒妨二農業一之条、還背二撫民一儀、自今以後所レ被レ閣二此法一也。然者除二高時法師党類一以下朝敵与同輩之外、当二知行一之地、不レ可レ有二依違一之由、宣二仰五幾七道諸道一。勿二敢違失一。但於臨時勅断者、非二此限一者、府宣承知、依宣行之

元弘三年（一三三三）七月二十六日　大史小槻宿祢

小辨藤原朝臣

などあり、周防にもち行しころは、五百餘紙ありしと云。いまは二百七拾餘通あり。又、尊氏の鎧・軍配・団扇等あり。又銅印（ひとつ）一面*130あり。其形（図略）いと古めかしきもの也。氏俊の息の妻は、大内義弘（おほうちよしひろ）の女也しかば、義弘とはかりて、朝鮮に使を遣して買物（あきもの）し、かしこの船をも爰にまねけり。其時の勘合印也といひ伝ふ。宗像氏郷（うちさと）・氏俊が、彼国に使を遣したる事は、朝鮮の人の書たりし、海東諸国記（かいとうしよこくき）といふ書にも見えたり。（また）黒き翁（おきなめん）仮面*132あり。この宗像朝臣の事、古き物を考るに、始にいひたる吾田片隅命の裔にして、君の姓（カバネ）也しか、飛鳥清見原朝（あすかきよみはら）の御世に姓の朝臣（天武）こは考に賀形君徳善といひし人の女尼子娘といひしは清見原天皇の妃にて、高市

神の告ありて田島に迁り玉ひしといふ。御前にぬかづきて、

すべらぎの御世守らんと久かたの天より爰に降りたまひつ

宮人にこひて神宝を見る。社記あり。その中に、

西海道風土記曰、宗像大神、自レ天降居二埼門山一之時、以二青蕤玉一（一本に八尺紫色玉とあり）置二奥津宮之表一、以二八坂瓊紫玉一置二中津宮之表一、以二八咫鏡一置二辺津宮之表一、以二此三表一成二神体之形一、而納置二三宮一、即隠レ之、因曰二身形郡一。後人改曰二宗像一。其大海命子孫、今宗像朝臣等是也。云々

人皇第七代孝霊天皇四年仁、自二出雲国簸河上一、筑紫宗像仁御迁宮、第一神者、集海淡築嶋、示二居於遠海之息（オキ）一、未来際可レ降二伏異国一之由、有二御誓留。件島（沓）、則号息御島、是日本与高麗中間也。居遠瀛、是於奉レ号二田心姫命一。第二神者、示二居中海之息（オキ）一、今号二大島一是也。厳重奇瑞多之居、是奉レ号二湍津姫命一。第三神者、示二居於海辺一、今号二田島一是也、居二海浜一是奉レ号二市杵姫命一、云々といへり。此外ハさま〴〵あやしき事などを記して、上古の物ともおもはれず。此社記は、後花園天皇文安元年（一四四四）に、大宮司氏俊（うちとし）、上代の社記を改め書たりといふ。三柱の御まし所、古の社記に見えたると、古事記・日本紀・この説々とおの〳〵異にして、何れともわきがたきが中に、澳津宮の市杵島姫にますことは、神の御稜威の殊に勝れ玉へるによそりたる御名にませば、何の疑かあらん。安芸にも、此宮を迁し祭りて、厳島といふ。市杵島姫のませばなり。（かの社記に筑前の思賀島より迁し奉るよし記せりといへり。今も筑紫人澳津島を呼ておきの思賀といふ。）又、この田島の宮を湍津島姫命（たぎつしまひめのみこと）といはんか。旧事記（くじき）に大己貴命（おほなむちのみこと）云々辺津宮坐神、高津姫命ヲ娶り事代主（ことしろぬしのみこと）命生まし、此御神の御裔（みすゑ）吾田片隅命（あたかたすみのみこと）也、といへれば也。吾田片隅命は、宗像朝臣の遠祖にして、世々辺津宮の側に住て、二柱よりも、此神を主（むね）と祭りて、今もしかり。され共、旧事記に、澳津宮を田心姫命としもいへれば、又、おのれさきにいへるにたがへり。とにもかくにも、この三所の御名のことは、定めがたくなんある。又、古き文書あまたあり。綸旨・院宣・庁下文（くだしぶみ）等を始として、頼朝（よりともきょう）卿より足利義昭（あしかがよしあきら）に到りて、世々将軍家の下文、又、探題（たんだい）或ハ太宰少弐（うちさだいにし）そのほか、近き国々の城主等の書翰・譲状九弐百六拾餘通あり。[*122] こは天正（一五八七）十五年、豊臣関白、つくしを平らけ玉ひしとき、大宮司七拾九代氏貞（うちさだ）去天正十四（一五八六）に卒（しゅつ）して世嗣なかりしかば、氏族のうちいづれをたてん、かれはたてじと、家の子ども乱れ争ひて、いまだ家継（いへつぎ）なかりしに依て、古くよりしれる限の神領・私領悉くをさめとり玉へり。其後、氏貞の女（むすめ）、周防国の草苅対馬といふ人の妻となる。此時、ふるき物どものかぎり、唐櫃にをさめ入て、かの家に携行れによりて、二百年ばかりのほど、この御社には伝らざりしを、時のゆければにや、近きころ、此郡の司富永（とみながのなにがし）何某とかいへる人、これをなげきて、さま〴〵と斗りいたづき、年月をつみて、再びもとのごとく、爰にとりかへせり。いといさをしきこと也。其中の一ツ二ツを書写したり。ここにのす。

なん。木立いとうるはしく神さびたり。後拾遺集に、右大弁通俊の筑紫よりのぼらるゝ道にて「あなしふく迫門の潮合に舟出してはやくぞ過る小屋形山を」と読玉ひしはこゝにて、迫門のとは此岬と地島の間の海八丁。をいへり。今も京に行には、この迫門を過てゆくめり。此山麓に織幡の社おはします。宗像五社のひとつ也。宗像五社とは辺津宮・中津宮・沖津宮織幡社・孔大寺山社是をいへり。此社の名は延喜式にも載られたり。今いひ伝ふるは武内大臣、此やまのいとうらぐはしきをめで玉ひて、われ身まかりなば、神霊は必この地にとゞまるべしと宣へり。故後に祠を建てかの大臣を祭るといふ。社の南東のかたに、大臣の父母を祝ふ祠もあり。葛原大明神といふ。万葉集に、ちはやぶるかねのみさきとしもよみたれば、そのかみ既に神社ませしなるべし。こゝにて御軍の幡を織しめ玉ひし故に、織幡の社といふとなん。もしくは軽嶋の御代にまゐでし兄姫によしあるか。兄姫の社は田島の西南奴山村に、縫殿大明神とてますなり。又鐘の岬ともいふよしは、岬の艮五町斗に大なる鐘の海中にあり。いづれの御世の事にか有けん、韓国より鐘をもてわたせしを、爰にて海に打はめたりとなもいふ。その鐘のあたりは、いまもさだかにそれぞとしらると、海人の指さしてをしゆ。宗像朝臣興氏といひし人、文明五年に大鐘をとらんとて、人をおほくつどへ、舟をあまたうかべ、海士をいれて鐘に大綱をかけて、曳あげんとせしか共あがらず。俄に風雨烈しく大濤起りて、海の中、鳴はためきければ、皆人かしこみて、とる事やみぬといへり。其後、慶長九年、前国主源長政朝臣地島の波止を築玉へるちなみに、此かねを揚んとおぼして、爰に来給ひ、新に波頭を築きて、舟どもおほくつどへて引玉へどもあがらず。二日三日経たりしに、又、さきの如く風吹いて、雨はげしく波たちさわぎてければ、遂に鐘をとる事をやめ玉へり。かの万葉集に、鐘の岬としもよみて、此時既に地名としもなりにたれば、鐘をもてこしといふは、いとも〳〵もあがれる世のこと也けんを、唯里の詞にのみ残りて、いづれの書にもみえぬこそくちをしけれ。鐘崎の里の上なる高山を湯川山といふ。沖つ島よりつねによく見渡さるゝ山也。其巽につゞきたるは孔大寺山也。山上に孔大寺権現の社あり。その東に宗像山あり。いづれも高山也。神湊より田島に行には、これらの方へはゆかず。されども道より見渡さるゝ所なればかきつく。

辺津宮は、神湊の巽一里、田島村にあり。宮所は、山あひの田の中に在。其地広く大にして、木立物ふりたり。御まへに御池あり。橋をわたせり。御社は乾の方遙に大嶋に向へり。本殿・拝殿・渡殿・神楽殿・御炊屋・宿直所・舞台・（鐘楼）・宝蔵・経蔵末社二十五社昔は七十五社有て所々に散在せり。近世社の内に移して二十五社につつる。今の世に拝み奉るにも、尋常ならぬ宮のたゝずまひ、ましてむかし、御社の栄へましゝ時は、とおもひやられ侍る。此御社には、田心姫命を主と祀りて、餘の二柱は（御社の）左右に別殿におはします。いにしへの辺津宮より爰に迁り玉ひしは、後深草天皇の建長年中、大宮司四十八世長氏といひし人のいめに、

に(祈)ぎ乞のむばかり也。子(ね)の時ばかり空少し晴て月さし出、なご(余波)ろもすこしく和(なぎ)たりとおぼゆる比、いと悲しき声しておらびさけぶ。すはや舟のよりぬとて、手々に手火をさゝげて磯にいで、舟はからくして漕よせたれども、磯浪高くして、ほと〳〵打かへされぬべく見えしかば、陸(くが)なる舟子ども磯ぶりのよする中に飛入々々、岸に助けあげぬ。人々いかに苦しかりけん。物いへど、舟子らいらへ(応答)もせで泣ゐたり。まして舟人ならぬは、いける心もなくて打臥ゐたりしが、人に助けられて、水舟のうちより、衣はしとゞにぬれてはひ出づ。されど船の内の人、ひとりもあやまちなく、さきかりし(幸)ことを、爰(ここ)も彼(かしこ)も悦びあへり。かく人のからきめみるにつけ、帰るさのほど心もとなくなん。後に舟人の語るをきけば、大島に風守りせしほど、いさゝか触穢のこと有し、これをや神の咎め玉ひけんとぞいふ。いとかしこくなん。

同(七月)廿三日。海もなぎければ、けふなも舟出すべけれど、よべのさわがしかりしにまぎれて、いまだ帰るべき設などもえせねば、あすこそとて、隣のかたの家に移りをり。

同(七月)廿四日。庭(海面)よしとて舟出す。二三里もや来ぬらんとおぼしきに、風あしとて、又本の如く漕つれて帰りぬ。ことしは、いつよりもあつさ増りたれば、秋も半近くなりぬれど、猶涼風もたゝず。あら磯の小屋の煤(すす)たれるに、所せく物ら打つみたれば、いと暑さ絶やらず。風待などの住ゐなれど、わびしくて有しやうにあらず。

同(七月)廿五日。なごり(餘波)　高しとて出たゝず。新防人(にひさきもり)の斎(いみ)の中なれば、触穢とていらず、磯にのみあさる。

同(七月)廿八日。けふは新防人の忌(いみ)もはれぬれば、打つれて正三位社にまうづ。風もかなひぬれど、舟子ども先(さき)にこりて(懲)、いざとて舟出す者もなし。一二人がすまふ(いやがる)も、たゆたひつゝ(躊躇)、とかくしてつひにやみぬ。

同(七月)廿九日。暁がたより、艮(うしとら)の風心よく吹渡りて、海の面もなぎたり。舟人ら猶たゆたひ(躊躇)しを、巳(み)の時近くなりてなも、舟を出せば、なほ日ごろは海浜の住居にわびて、帰るべき日をのみかぞへたりしを、今はと出たつには、さすがになごりをしまるゝ心ちす。海つち(路)五里ばかりも来ぬらんとおもふほどより、風はやく強く吹しきりて、浪の華を咲そふばかり也。艫(とも)より懸浪うちいるれども、追手なればとて、すこし心をのどめてゐたりしを、申(さる)の時(午后四時)ばかりには大島につきぬ。

八月朔日。今(け)ふなも辺津宮にまゐらんとて、先中津宮にぬかづく。大島より辺津宮に参るには、神湊(こうのみなと)に船よするぞ直路(すぐみち)にはあれども、あしき病を煩ふ人多ければとて、神湊の半里ばかり西、勝浦(かつうら)と云地(ところ)につく。爰より田島(たしま)に壱里半ばかり有。そは神湊の人家の南の辺を経てゆく也。（いにしへ辺津宮の有し跡は、神湊の東六町ばかり、松原のうちにあり。）直に海に臨て大島にむかひたり。（田嶋に宮を建せしよしは、田島のところにしるしぬ。）此磯づたひ艮(うしとら)の方の崎の岬也此岬丸くして海の中にさし出たるさま、屋形(やかた)の如くなれば、さやかた山(小屋形)ともいふと

なれにたぐへむ妹もあらなくに

同(七月)十日。海人等(すなどり)(終)しをへて大島にかへる。此二日三日ばかりは、海も静なれば、帰らんとて、船出を占ふ。神のゆるし玉はねば、と(止)やみぬ。けふなも占ふ。又さきの如し。もて来し鰒鋒(アハビガネ)といふものを、一ツ正三位社に献りて畏りを申しゝかば、やがて船出をゆるし玉へりとてなむ、船びらき(出航)す。夫につきて、かしこゝあやしとおもふことあれど、世に不言嶋(いはずしま)としも憚来つるに依て、つばらか(委曲)には物せずなん。隣国の人此島を見つけて不レ言島と云。そは神異のことのあるをば家にかへりて人にはいはぬよしの名なり。

同(七月)十一日。白嶽の下に行て釣す。此嶽は嶋の艮のはてなる峯也。峯は青海より直に立のぼりたる一ツの大嶽也。岸もなく、磯もなくして、峯の頂まで壁立(カキ)たれば、猛き獣(けもの)といふとも、かけりつべくおもはれず。まして、人ののぼらんことは、かけてもおぼえずなん。峯の北のかたに谷あり。船より遙に見あぐるに、椶櫚(しゆろ)の形して大きに葉も椶櫚よりは長く垂たる木、多く立茂れり。大嶋の海人ども、こを誤りて椶櫚(しゆろ)といひて、その谷をも椶櫚(しゆろ)谷とよべり。此樹は、おのれさきに志摩郡の(小)を呂嶋にて見し備呂(ビロ)といふ木也。椀狼(ヒロウ)の類にや。此峯さばかりの高き懸岸(カケキシ)の上にしあれば、目近くえ見る事あたはで、其さま詳らかにしられず。崎守にある日数もやうやく立ぬれば、かはりの舟やくると、日々に山に登りて、南の海づらを詠(ながめ)つゝあり、忌詞(いみことば)なども、やう〳〵帰るべき間近くなりて、いひあやまたずなりぬ。此島に忌詞あり。仏経・僧尼等を始て、器やうの物にも忌詞あり。されど古のは失果たりとみえたり。今いふは海人の定めつると覚していやし。

同(七月)十五日。こよひ月いとおもしろし。月は海の底よりぞいづる。「照月の流るゝみれば天の川出るみなとは海にざりけり」とよめりしもいまにしられて、唐和(からやまと)のふるきうたの、折につけておもひ出らるゝを、打ず(誦)してながめあひ、

月人のあまの河とを船出(註四六)していづことまりとさしていくらん(稲ぐ)

おのれこの四とせ五年(いつとせ)のほど、江門(江戸)に在て月見しに、草より出で、くさにいるはあれど、こよひの月にはくらぶべくもあらず。物かはにぞおもひ過ゴさる。出るも入るも、唯浪の立さわぐかとのみ見えて、雲かとまがふ山端もなければ、大空を海のやうにおもはれて、南の海はおしなべて白銀をしきたらんが如し。

よもすがら流るゝ月の影みれば浪のあなたやとまりなるらん

同(七月)廿二日。未(ひつじ)(午后二時)の時ばかり、船遙にうかみ来、申(さる)(午后四時)の時ばかりに島に着ぬ。日比待わびたりし防人のかは(交替)りの船也。いま一ツの舟、わづか一里ばかりもや隔つらんとみしほどに、俄に空かきくもり、北風烈しく吹しきり、濤たちさわぎて、大海おどろ〳〵あらびたり。とかくするうちに、日もくれぬ。いと暗きに、いかゞはせんとて、さきに来つきたりし舟子ども、あはてゝ磯に火を挙て、爰に〳〵と呼けれども、船ありともおぼえず。浪のそこにや打いれられけん、又は風に放されて、遠き嶋呼子浦などにや流行(ながれ)けん。夜あくるにつれて、浪の音は、千百の雷(いかづち)の鳴はたゝくらんやうなれば、よも此島に向ひて柁を立てはえあるまじ、助けに行べきやうもなければ、人々神

また壱岐連てふ姓を雪連と書もこれ彼見ゆれば、もと彼国の名の壱岐は雪にして、頓て此嶋より一国の大名となりしにやあらん。筑紫の海人どもの、常に壱岐をば壱州とのみ呼て、壱岐・雪などとおしていふ時は、国名にはあらで、彼小嶋のこと也。これらも何とかや由縁有げに聞ゆ。こはおのがおしあてのさかしらなれど試に書つく。此嶋の大神いたく汚穢を忌玉ふに依て、山中にてかりにも唾・小便ることなし。もし過ちてけがす時は、其地の土をすくひ、海に持出で、磯に捨て、清き砂を、先の土取し跡に埋みて、本の如くならしおく。是を犯してしかせざれば、忽狂乱などする。近頃にもさる人ありて、誰もよくしれることぞかし。さるべき設にとて、昨日より大なる竹筒作り置て、緒して腰に佩るやうに構へ置たれば、けふなも、人々筒を腰に付つゝのぼる。峯を下るには、蔦かづら・木の枝・岩角などに懸りて、いとわづらはしく、吾も人も行なづみて甚見ぐるしくなん。爰より御社の東の峯をつたひて下る所を金崎といふ。こは先に、鐘崎の海人等の漁に来ていほりせし地也。故に号けたり。いまは来らず。此岑の上に、松ひともとたてり。茂山なれど、松樹は嶋の内に唯これのみなり。

ありそみにたてる山松なれをかも憐とぞおもふ独しあれば

同四日。壱岐のかたの海に、白浪の山のごとく高く見ゆる。怪しみ見るほどに、くろく大なる魚の、浪をかづきて浮沈つゝ行也。かの物しれる海人、せみといふ鯨也といふ。から哥に、鯨魚跋ㇾ浪滄溟開、といへりしを思ひ出られたり。此海人は肥前国松浦郡の湊浦といふ所の者にて、鯨を取時に、海底を潜、鯨に縄を着ることを業とする、はざしちふ者なり。こたび大島の海士にやとはれて、六月の中比より来て、かのあたりの事など物語るに、すこしは旅の思ひをはるけぬ。

同十一日。西の方より大なる竹、浪のまに〳〵ながれ来る。船漕出て取あげみれば、銭竹なり。長さ六尋ばかりなり。網の泛子やうのもの也しとみえて、根かたに穴を彫たり。ところ〴〵石花・蛎などつきてをかしき物也しかば、人々花瓶などに切て翫ぶ。

から国を佗てし爰により泛子の網手やひとりうきねすらしも

同六日。海人のかづきを見て、

かづき得てわれに得しめよ大海の水底てらししづくしら玉

爰の鰒はとる人稀なる故に、世にこえて大なれば、玉もありぬべしとて、磯に出で、日々に海人の取得たる鰒のうちを探る。白く光なきは孰も多く取得たり。けふなも、青く光あり、其大さ大豆ほどなるを得たり。人々うらやみて、ねたきこと共をいふ。

わたつみの神の釧やたえぬらん浪間に拾ふあはひしらたま

吾はもや白玉得たり皆人の得がてにすとふ白玉得たり

とやいはまし。

同七日。きその夜なかより海あれて、磯に沖つ藻の多く寄たる見て、

あやなくも来よる玉藻のうつくしみ

上巻終

防人日記　下

七月二日。つとめて（早朝）、一の嶽にのぼる。峯は磯より三十町ばかり、いとさかしき岩のかけぢ（磯道）にて、いづこを道ともわきまへず。石綱（いわつな）ある註四一は木のうれなどを踏て、み山の猿ならねど、かなたこなたにつたひわたり、やう〳〵峯に登りつきて見れば、峯は只麓より立のぼりたる一ツの巌也。その岩白くして遠く見放（さく）れば、山はなべて雪の積たらんが如し。これより艮（うしとら）の方をさして峯三そばだちたり。此みねは、西南のかたに在て最高く、艮なる二ツはやゝく低くて、目の下に見渡さるゝばかり也。そのいやはてにある峯を白嶽といふ。こは餘（ほか）の峯よりも、其いろ殊に白き故に号（なづ）く。峯の岩に尻かけて、西北の海をはろ〴〵と打見渡すに、長く引はへたるは津島（対馬）也。つねに磯より見ゆるは、国府の上なる銀山（カナ）、こは誠に高山にて、かの辺にては外にかぞふべきもみえず。日ごろ小島の多くならびたりと思ひたりしを、爰よりみれば一ひら（枚）の大なる嶋にて、銀山の北のあたより麻続（おみ）なすひきはへたり。銀山の北のかたに、山の絶る地（ところ）の見ゆるは今切（いまきれ）の迫門（せと）とかいひて、近比山（ちかごろ）あひを掘通し、東より西に海門をひらきたり。鰐の浦の方と国府とは海門を隔て二の島のごとしなど、率（る）てのぼりし海人の其あたりの事しれるが、さしてをしゆ。けふは風もふかねば、海の面も鏡なす澄わたりたれば、しらぎの国や見ゆると、人々見放（さく）れど、秋たちていくかもあらねば、夏のけはひ残て、対馬よりあなた薄雲はれやらず。

ふる郷のかたりにせんを栲角（たくづぬ）のしらぎの国に雲なたなびき註四二

いましばしありまたば、などいひつゝ、土（埴）さけて照る日をもいとはずまもりをるに、やゝありて雲の立のぼるまに〳〵、睍如山（まよびきなす）の端などみえたる、人々あなやといふ。そは鰐（わに）の浦の東北いと遠（遐）そきて、雲かとのみあやまたる。此島より北の方也。八月・九月（はつき・ながつき）比の、清くさやかなる時ならましかば、とぞいひあへりける。

向さくる山にし有りし大きみの官家（みやけ）となりし百済国（くだらのくに）は
国津物（くにつもの）さはにまつり（貢）て御馬飼（みむまかひ）の部（トモ）に仕へし新羅国（しらぎくに）はや
言さへぐ高麗（こま）のこきし（王）も天皇（すめろき）のやつことなりて仕へまつりし

西南の海をかへりみれば、壱岐の島いとよく見ゆ。さきの海人がかたらく、風本（かざもと）の西の方一里ばかりに白き岩嶋あり、周廻二三町ばかりもやあるべき、嶋の上は草木なし、海の上に雪の浮（うか）みたる如くなる故に、雪の嶋となもいふ、其島雨風はげしく海あれぬべき時は、かねてそのいろかはりて真黒に見ゆ、あやしき島也、そこらの海人、是をうかがひて日和を占ふに、違ふことなし、といへり。これによりて、つら〳〵思ひめぐらすに、古き書の中に、一岐を由伎（ゆき）と訓み、

に落ちりたる木葉をはらひ、（石をしきなどしてつかへまつる。神山の内に入には、）つねに声とゞろかしてゆく。もし、ひそかにゆけば、神の游び玉ふにゆきあふといひ伝へたり。

玉ちはふ神につかふと崎守は岩ねさくみてけふもまゐです（註三五）

とつゞしり哥ひて、朝ごとに御山をのぼりくだりす。

五月朔日。（さつきのついたち）けふなん、高の社にまゐりて、杜鵑（ほととぎす）を聞つ、と人のいひければ、

高々にまつ吾をおきて深山（みやま）べに鳴べきものかしこほとゝぎす（註三六）（酸）

嶋の西の方、対馬にむかひて、大なるいはやあり。高十丈ばかり。深さも同じほどなるべし。潮のみつれば、窟の内に浪打いる。又、その少し南の方の磯に、高六七丈ばかりの劔のさましたる大巌ありしが、近キ年大浪にてをれたりとて、三段（キダ）になりてあり。此あたりの磯の岩ども、皆あやしき形也。又、高き岩岸に、縄を懸てのぼり下りする所あり。岩の上より、水のしたゝり落て打ちる。故（カレ）霧雨（きりあめ）となもいふ。そこをゆくとて、

狭霧（さぎり）ふるいはのかけぢはかしこけどわれはかよはん万代までに

神山にのぼる山道にて

神山の木のくれしゞにかほ鳥（貌）の声のこほしきこの朝けかも（註三七）

木（こ）のくれ暗たどきもしらにおぼゝしく我行道にたれよぶこ鳥（註三八）

磯の山の東のはなより、遙に長門（ながと）なる角嶋（つのしま）のみえければ、（註四一）

秋の野の萩ふみしだき鳴く鹿のつゞく角嶋（註三九）浪まより見ゆ

六月朔日。西北の海を見わたして、

しらきべ（新羅）は夕立すらし百（もも）ふねの津しまの祢（ね）ろゆ雲ゐたちくも（註四〇）

この五日六日ばかりがほどは、大なる亀ども、磯ちかき海にこゝら浮出てあそぶ。又、五月の初つころより、いるかのいと大なるが、この磯べちかくすみてゐたりしが、近きころは見えず。

廿七日。（六月）きのふより海あれ、白浪いやたつ。防人のやどりの南の磯に、太鼓（トル）岩とて、岩の根地中（ねつちなか）より生出たるにあらず、磯には（延）へたる岩の上にすわりたる岩あり。岩の下のほど、間ある中に波の打入て引落す音、鼓をうつに似たり。かれ鼓岩といふ。「立浪につゞみのおとを打そへてから人よせぬ沖つしま守」とよめるは、此所也と、貝原翁いへり。此岩浪の打よする度ごとに、ゆら〳〵と動くを、人々あやしみて、其大さを量見（はかりみ）るに、高三丈一尺三寸長四丈四尺横弐丈五尺あり。また、向ひなる小屋嶋は、浪の打よするさま、すざましさ譬ふべき物なし。こはよのつねの磯の岩など浪の打こすとは殊にて、溟渤（おほうみ）一面に高くもりあがれば、嶋は海の底に沈て見えず。海低くなるかと見れば、忽ち嶋あらはれいづ。四方の岩岸より、潮のたぎち流るゝさまのかしこき、胸もとゞろき、目もくるめくばかり也。磯もくづれね、と打なみに、防人の家も、浪にとられぬべく覚えて、手々に器などひさげて、高の小屋にのぼる。（いにしへより家を大浪にとられしこと多し。故（かれ）さる時の料にとて、正三位社の後高き所に別に屋をつくりて、あり。その屋のあるところを高といふ。）暁がたより濤（ナミ）のおとよわりて聞ゆ。

釣垂れしに、大魚のうなそこより游出て、鰭をたてゝ浮沈む。その大きさ乗てこし舟にひとし。人々恐ぢて、岩の陰にかきつきふるひをり。あまどもは、かれとりてん、などのゝしりあひ、鋒取のべ、岩の上に立わたる。魚は青海をとよもし、沖のかたに出ぬ。よく〳〵みれば、鮫魚にざりける。

おきつしまを見さけて、

こゞしかも岩の神さび福草のみかみの嶽に雲ゐたなびく

此嶋の東南の方、海中に、御門柱とて、高さ七丈ばかりの岩、柱の如く立のぼりて、二ツならび立チて、沖つしまに向ひたり。其かたち怪也。両岩のあひだ、十間ばかりもやあらん。其間、海甚ふかし。

ふたならび大海の原に立ならぶ御門の岩見るがたふとさ

或日、御社にまゐりて、

天地の　始の時に　天照す　日女尊　味凝の　あやにかしこき
神語に　のらし給はく　三柱の　姫大神は　わたの北の　道の
みなかに　しづまりて　御孫命の　樛木の　弥つぎ〳〵に　知食
天津日嗣を　守給ひ　誓ひ給へと　言依し　よさし玉へりそこ
故に　御ことのまにま　あま雲の　やへ掻わけて　筑紫なる
崎門の山に　あまくだり　いまし玉ひて　水江の　青蕤美玉を
沖つしま　此大宮の　みしるしと　いはひまつらし　八坂瓊の
紫の玉は　中津宮の　しるしにおかし　八咫鏡　とらし玉ひて
辺津宮の　神の御象と　のり玉ひ　おかし玉へり」しかれこそ
いまのをつゝに　福草の　みつのみたからを　三所の　神の御
形と　をさめ給ひ　いつきまつれり　うべな〳〵　身のかたの
宮と　御名に負せり

反歌

みたからを沖つ御しまの此みやにしづまりいます皇大御

神御嶋のめぐりなる岩に、金おほくあり。そは浪に打出されて桃の大さなるもあり。又は岩の缺たる内に、切金などいふ物の如くなるがいくらも出るあり。又、水晶など見る如く、方に刻立たるやうなる黒きかねの出たるもあり。打わりてみれば、中は銀の如し。中にも、水の嶋といふ所のあたりの岩岸、すべて金のみ也。雨降て晴なんとするころ、日のさし出たる時などぞ、こゝら光りあひてきら〳〵し。その岩岸に水のしたゝる所あり。土さけてる夏の日にもかるゝことなし。もろ〳〵の病をいやす。陶物あるは竹筒やうの物に汲て持返る。国人いたく重みしあへり。此水の流れ出る下の磯の岩角に、金のいろしたる小き海鼠をれり。俗に金海鼠といふ。

おひ人のわかゆとふ水ぞ沖つしまありその岩井いざむすびてな

目かがやくこがね花さく岩のまゆいづる走井のむはしよしも

はしりゐの水底さへにてるまでに五百箇岩むらにくがねかゞよ

ふ

級戸辺のいぶきしづけかれば、韓人のよりくとふ事もなく、手むだきをれば、防人等は、ひたすら神につかふる人の如く、朝夕に御前

十六日。大神の宮にまゐるとて、まづ正三位の社にぬかづく。岩さきのさし出たるところに御社あり。また側に、荒船社・蛭子社あり。岩崎の(下)を御手洗といふ。岩間に浪の打いる所あり。其海に船の形したる岩瀬二あり。荒船岩といふ。あらふねの神をいはふよしいへり。夫木集物名に、「茎も葉も皆みどり成る深芹はあらふ根のみや白くみゆらん」とよみしは、爰のこと也、と貝原翁いへり。正三位社より坂路五六丁ばかり登り行ほど、日のめもみえぬ迄木立しげれり。宮地は一の嶽の麓、大なる巌の物の足のごとく三ッ聳たるはざまにおはします。いと神さび、心すごき所也。神殿・拝殿・末社十五区側にあり。拝殿の前にから堀あり。又側に竈あり。御宝蔵といふ をろがみまつりて、のりとをさゝぐ。

懸まく畏き言まく綾に忌々しき瀛津宮尓鎮坐須田心姫命・湍津姫命・市杵嶋命と御名は申て称辞竟奉る三柱乃皇神等乃大前尓畏み畏み申須。種麿皇朝の上都(大御代乃)大御手風を痛久慕奉り古き御史等を璞の年月重子雖読考従来浅き心尓真白玉潜得る事之難久、足曳の山乃麓山の浅き智には蔭豆羅可取得き手着む無在き。可畏皇大神ハ御稜威逸早久世人を幸閉給ひ守給ふ事、満潮の弥益尓御坐バ、種麿祈申願申事を、神在随安く平ぞ聞食、真寸美鏡押羽夫留事の如く、上都大御代の大御手風等、百隈も不落、明ら審ら教給ひ令悟給ひ、又僕我親族産子の八十綿連も、常盤に堅盤に伊賀志夜久波叡の如くに立栄志朱給へ、と小鹿如膝折伏、宇事物頸根衝抜て、恐み恐み申す。

神社の山のうち、何となくかぐはしく、心もすが〳〵しく、かの神楽哥に、榊葉のかをかぐはしみ、とうたへるも、かゝるをりにこそ、とおもひえ侍りぬ。祭終りて、神主の斎屋にてえらぎす。舟人ども酔しれて、岩坂のけしきをよろぼひつゝ登り下り、国栖人ならねど、口鼓をうちてぞあそぶ。

十七日。おのれが家に在し橘樹をもてまゐりしを、御前にうゝとて、そへてたてまたす哥、

霜おけど　いや常葉なる　とこよもの　あへたちばな　ほつ枝に　白和幣かけ　しづ枝に　青にぎてかけ　はろ〳〵に　いこじまゐりて　かしこきや　神の御前に　ほりうゑて　のみまつらくは　これの葉の　とこしきが如　これの実の　かぐはしきごと　万代に　さかえをゆかん　皇神の　御魂たばりて　ちはひ給はね

反歌

時じくのかぐのこの実をまつり置て我もあえてんそのとこしきに

十九日。小屋嶋にあさる。此しまは、沖つしまの東南廿丁ばかりに在。高さ七丈ばかり。なべて巌のみにして土なし。木もなく山の上に草少し生たり。岸にいがひ・さゞえ・蠣石花多し。深き岩の谷に、浪の打入音、雷のごとし。あら・すゞきなど釣んとて、岸に臨みて

けふは、いとよく晴わたりて、沖つしま見ゆ。

六日。（四月）けふも船出（いだ）さず。

七日。（四月）おなじところ也。浜に出て、あびき（細引）するを見る。

八日。（四月）追手なれど、浪高しとて船出さず。かゝるをりにや、むかし、貫之ぬしの土佐へゐてこし（率）わらはの（童）、海つ路（ぢ）にて

たてばたち（立）ゐ（居）れば又ゐる吹風と浪とはおもふどち（仲間）にや有らん

とよめりしもおもひ出られたり。

九日。（四月）風浪も叶ひぬればとて、神づかさ（主）がり（許）行て、占ふに、中らのほど少しあし、こは風のなぐにやあらん。追風に帆を挙てゆかざれば、舟路永きゆへに、こぎてはゆきがたし。依て風なぐともあしといふし也 着（つき）のほどよろしければ、心にまかせぬは、神に祈まつらん。大島より沖の鴟にわたる海中四十八里ほどのなかに、小島一もなく、まことに大洋なれば、舟よすべき鴟崎なし。依て風浪を見て海上のことを占（占）ふ。そのうら、船出す時と、海の真中と、島に着時と三をうらなふ。出る時と真中とは、心のごとくならねども、着のほどよければ船を出す。出・中吉也とても、着べきほど凶なれば、ふねをいだすことなし。いざ。よそひたゝせよ、われも共に舟出せん、とて漕出たり。神主は恒例の祭に仕へ奉るとて、（島に）わたる也。

神中（ふみなか）に行ける時、手向（たむけ）すとて大島の海（土）等、沖つしまと大島の海の真中を神中といへり。

蒼海原（あをみはら）神のみなかにぬさまつり幸（さき）くもがもとこひのむわれは

左り右り見めぐらせど、向伏（むかふす）雲のみ也。あへて漕出し七（ニカ）の舟は、木葉のう（き）たらんよりもちひさし。浪のたつとにはあらねど、大海のゆらふに、人々心あしみして、かしらを舟簀（ふなす）にあてゝ、物をもえいはず。舟子ども（は）、神の御心にかなひ玉へる人々にこそあらめ、年ごとに行かへども、かゝるしづけき海をわたりし折なんなき、とぞいふ。近づくまに〳〵仰ぎみれば、其さまいとあやしくて、他国（ひとくに）に漂着（ただよひつき）たる心して、天皇（すめらぎ）の所食（しろしめす）国（くぬち）内ともおもほえず。

しら浪のやへ（八重）をるがうへ（折）に阿（イ）やしく（奇しく）もいます神かも沖つ御島は

磯におりゐて、海の平けかりしを、互（かたみ）に悦びあへり。神司（かんづかさ）は懸（かけ）崖の下なる磯にいほりし、忌こもらす。

十一（四月）日。さきの防人（サキモリ）、例の事どもしをへて舟出す。家に文ことづく。神官（かんづかさ）のいほりは、防人のすむ家に近ければ、物忌のほどは、互（かたみ）にゆきかひつゝあかしくらす。此鴟に来る例。七日の間朝ごとに潮にみそぎて、その間山中に入ことなし。七日に当る日に、正三位社（志賀の神を票るといふ。）にまゐりて、八日に大神の宮にまゐる。毎朝海水を浴て正三位社にまゐることは、其後もかはることなし。大神の宮には、つねはみだりに参らず。神威を恐れて也。神づかさの請（こひ）によりて、神代巻（かみよのまき）をよむ。又、おのれ上代（かみつよ）の学びのことを祈（ねぎ）奉らんと、ふりはへ（振り延へ）て思ひ来しかば、祈（いのり）の御手ぐらにとて、豊後国風土記と、延喜式の大祓の考（こう）とを写して奉る。

十五日。けふは物忌の七日といふ日なり。いまだ明もやらぬにおきいでゝ、

おきつしま磯もとゆする（り）たつ浪に新防人（にひさきもり）いみそぎするかも

神司（かんづかさ）は、あすなん恒例の祭つかへまつるべきとて、四月と十一月と、両度の祭あり。神主大しまより渡海す。祭日は定まることなし。渡海の第八日にあたる日よりまつりをなす。海人（あま）どもをゐて（率）、瀛（おき）に出て、魚（釣）つらす。

さき魚（鮭）だにえず、神の御心やなぎ（和）給はぬ、などいひあへり。日もくれなんとするころ、おい（鮭）をちふものゝ三（尺）さかあまりあるを二つり（釣）あげたり。神官のよろこび、いはんかたなし。

四月朔日。同じ所なり。瀛津しまにわたる人々、爰より、朝ごとに海に入て身そぎす。そも〳〵此津は、いつしき皇神の静まります(冠)けにや、人ごとに、物いはひして、けがらはしきことを、いたく忌はゞかる。身まかりたる(死者)をいむ(忌)はさらにもいはず、女の月のけがれあるをば、別戸(コトイヘ)をつくりて、主(あるじ)の家にいるゝことなし。そのほか、よのつねはなほざりに打過すことを(も)、此浦人はつゝしみて、かりにも犯すことなし。さきに過(すぎ)こし志賀(しか)の嶋も同じならはし也。いづこも、みやこめきたる所は、人の心さかしだちて、物いみなどするをば、愚なることにいひあふめるを、かゝるひなびたる所には、かへりて古の風(フリ)の残れるもの也。かゝるならはしも、神から(隨)ならずや。註三三

けふ御嶽にのぼりて、をちこちを見めぐらすに、東は長門(ながと)のしま〳〵よりはじめて、此国なる山鹿(やまが)の岬、南には豊前の彦(英彦)の山、坤(ひつじさる)には御笠郡なるかまど山、早良(さわら)郡なる背振(せふり)のみね、怡土(いと)郡の雷嶽(いかづちたけ)・浮岳、同郡の姫しま、肥前松浦郡なる名護屋(なごや)崎、同郡の平戸(ひらど)の嶋壱岐(いき)のしま、此国なる大蛇(おろ)島、乾(いぬい)(西北)のかたに対馬(つしま)見ゆ。瀛のしまはいづこぞ、と見れど見えず。北のかたは、凡(すべ)て何もみえず。猶めい(眼)たき(疵)迄みるに、辛くして浪のひまより見出たり。津しまの少し東の方に、嶺二あるが、海の中よりものゝ角さし出(いだ)したらんが如し。おのが行べき嶋はあれにこそ、といふに、皆人肝(肝)ぎえたり。いかで一たびは御嶋にまゐりてしがな、と心にねぎしかど、いまかくものすべしとは思ひかけざりしを、いとたふとくて、遙にをろがみまつりて、

いつしかも見むとおもひしむなかたの
　沖つ御島を見るがともしき 註二四

中津宮にまゐりて、海の原安けく平けく、船泊(はて)しめ玉へとのみ(祈)奉り、御前よりまかる(罷)ときに、

　天の川々霧(かはぎり)たちて劔たち宗像の神のむかしおもほゆ

又、

　むなかたにいつく(斎)祝部(はふり)のゆふ(木綿帷)たすき 註二五

　かくるもかしこ神のむかしを

三日(四月)。猶同じところなり。沖つしまの神づかさ河野ぬしがもとより、来べきよしいひおこせたり。打つれてゆく。酔しれて、日の暮るをもしらず遊ぶ。

四日(四月)。風波やむべくもあらず。いつか沖つしまには渡りぬべき、とのみいひあへり。浪のたつを見てよめるうた、

　梓弓(あづさゆみ)はるはくれしをわたつみのかざし(挿頭)の花はいとゞ咲(そふ)

とぞいへりける。

五日(四月)。浪風静なれば、船出せよ、といへど、柁取遙なる舟路にしあれば、追手のおりずは、いかで漕あへん、といふに、人々いたづらに海原をながめつゝぞある。はか〳〵しくもの語(かたら)ふべき人もなければ、いと佗しくて、日々に、山にのぼり、磯に出つゝ、同じ所をとほる。沖津みやの遙宮にまゐりて、

　角障経(つぬさはふ)岩瀬の磯に潮まつと戝(かし)洞ふりたつる蜑(あま)の釣ふね 註二八

にも嶋長立出、やどりに率てゆく。人々ともなひ、山にのぼりて、福岡のかたをみれど、そこともなし。

わたつみも心あらなん白浪の立さふべしやわぎへのあたり

嶋のうしろの岸、浪の打入ところに、大なる嵓窟あり。十丈ばかりの岩の懸道をくだり、からくして窟の口に行たり。磯の岩むらに、浪のよするもすさまし。沖より、蜑小舟あまた漕つれ来て、ほどなく、里ちかき磯に網引す。舟をおし出て見にゆく。瀛のかたなる海士ども、舟の上に立わたり、手飄してまふ。辺つかたなるあご等、幸あり、とのゝしりつゝ、諸声にひく。海の中てりわたりて、金をしけるが如し。弐尺あまりの鯛の赤くてれ(るを)さわ〳〵に引よせ挙て、二三ツ舟のうちに投入たり。人々めづらしみて、大なる笥にうかべなどして遊ぶ。此嶋の名、書紀の息長足姫尊の御巻に、吾瓮と記されたるを、いつよりか、藍島といへり。又、無題詩集には、阿恵嶋と書り。此地に火々出見尊・豊玉姫命の御社あり。晦日(三月)にはもしづけしとて、あへぎこぐ。嶋の東の海中に、高五六丈もあらんと見えて、蟮・したゞみなどの形したる岩あり。その中らに、大なる洞ありて、東より西にとほりたり。洞の中へは、小舟も入ぬべし。いとあやしき地也。

あべのしま　漕たみゆけば　註一六　青海に　しろき浪たつ　蟮のわた

かぐろき巌　註一七　わたつみの　ちひろの底ゆ　奇しくも　高くたゝ

せり　そのいはほ　いはひもとへる　細螺子の　象なしつゝ

万世に　神さびをるか　わたつみの　神の宮こそ　註一九　鱗なす　や

巣かすは有とへ　しただみなす　御門もあらん　その宮は爰にま

しけり　其みかど　爰にましけり　かしこけど　行てはやみん

わたの宮こそ

反歌

ありかよひ来乍かく見むあへのしま鵜のすむ石による浪の如

鷗のさましたる大なる黒き鳥の、潮さゐに浮居て魚をくふ。見なれぬ鳥なれば、舟人にとふ。だいといふ鳥也、とこたふ。柁取のむくつげなるが、声づくりして、これなん海の医者殿也といふに、皆人たへやらず笑ふ。いと腹だちて、さな笑ひ給ひそ、其よしもしらで、といふ。さらばそのよしかたりね、といふに、水鳥の病るが磯にふしなどしおるを、此鳥来て、羽あるは尾なンど喰もち、ひこづらひて、遂にその病をいやす也、といふに、人々かまけてをれり。名児山・桂潟見つゝこぐ。けふも日くだるまゝに、浪高く、大嶋に着ぬれば、風も吹出ぬ。鐘の岬を見わたして、

風まもり大しまのへに我をれば鐘のみさきにしら浪たつも

大しまに、宗像の神一柱おはします。中津宮と申は此宮也。御社のまへに小川あり。天の河といふ。天の安河によれる名成べし。註二二彦星ノ宮・織女の宮と、川を隔て左右りにあり。男女のつまをねがふもの、此やしろにこもるといふ事、中ごろの書に見えたり。上の高き峯を御嶽といふ。天照大御神のみや也。

らつ崎の西の海辺より船乗す。古言に心よせある人々、おひ〳〵、おのがもたる本なんど餞してあたふ。（この）ひと〴〵、せちにわかれをしみ、幸く行て、さきく帰りこ、ぬさとりむけてのみつゝをらん、たか〴〵に待つゝあらん、といふに、

沖つ波ちへにたつともぬさまつり君しいのらばあにさはらめや

わたの原嶋のさき〴〵雰たゝば君がおきその風としもはむ

よみもはてぬに、船漕出たり。（いにしへの）防人等が、東の国より、はろ〴〵と、溟渤をわたりて仕へまつりしさま、思ひ出られて、あはれにこそ。今かり初の旅だに、別るといへばかなしかりけり。此船出する入海のさま、世にこえておもしろき地にしあれば、これの年ごろ東に侍りて、又いつか見るべきなんどこひわたりしに、六とせばかりを経て、けふしも来つれば、いとめづらし、と打見わたすに、入江のくま〴〵、いづこもおかしき中に、わきて打昇の浜のありさま、かしこき画工の筆にも書うつすべからずや。青き海に、いと清らなるまさごの、拷領巾引はへたらんやうにて、今の道三里ばかりつゞきける。あらゝ松原の、とほく打けぶりたるなんど、目もはる〴〵也。後九条内大臣の、山までつゞく海の中道とよみ給ひしも、この所にや。今は奈多の浜となんよぶめり。志賀島近くなりければ、

足姫神のみことのいでましの御舟はてけん浦ちかづきぬ

とかする内に、西風ふきて、しら波たてば、あすこそとて嶋におりてやどりす。嶋の長出向ひて、これ彼レものたらはしたり。此島に、阿蓍連等がいつく底津少童・中津少童・表津少童三柱の皇神ます。里（の）上なる御社に、底津わたつみの神を祭りて、餘の二柱を相殿とす。又嶋の北一里ばかりに、勝間といふ里あり。其浜の松の林の内に中津宮あり。中津少童命をまつる。其少し北の方、海の中に小島あり。沖の明神といふ。表津少童神をいつく。阿曇連の裔は、聖一国師につきて僧となれるよりぞその家はたえにける。いま社の側なる吉祥禅寺は、其僧の建おけるによりて、いまに到りて御社につかへ奉る。猶神官の内には阿曇氏と称これ彼あり。神垣のあたりより、東の海づらを見放れば、香椎潟の潮干のうら見わたされておもしろし。こなたの磯にはあま小舟多くつどひたり。

志賀の蜑小舟つらなへ放りそのありそのうへにたまもかる見ゆ

也良の崎も近けれど、霞こめたり。韓亭はいづくぞといへど、心あてにもみえず。

春霞たちかくしたりから泊のこのうら浪見てましものを

島の西のかたに、磯良崎とてあり。海の神のあがり玉ひし所也、となん里人いへり。

神さぶる磯良が崎による貝をひりひてゆかん袖はぬるとも

廿九日。いまだ起もやらぬに、舟人、追手よし、とぞいふ。島漕そきて顧れば、（きのふ）おぼほしかりし韓泊も、けふはよく見え渡りたり。鷹嶋・可也（の）山もほど近く見ゆ。けふは、宗像郡の大嶋までとおもふ。浪たかければとて、糟屋郡なる阿閉嶋にとまる。こゝ

青柳種信著
平野国臣写　瀛津島防人日記　上下二巻

例言

一、収載の防人日記は、多く変体仮名で書かれているが、すべて現行の平仮名で組みあげた。
一、誤字・脱字であることの明らかなものは、すべて訂正をした。
一、言葉の右側に括弧して、訓みまたは異字をつけ、読み易くした。
一、句読点をつけて通読に便ならしめた。
一、疑問の字句・文章は、原宏の内閣文庫本『瀛津島防人日記』による活字本（三一書房刊）を参照して補正した。
一、なお、三一書房刊活字本には、上下巻合せて一四八件についての註記がある、進んで防人日記の精読をする人士にとっては、大いに参考とするに足る労筆である。末筆ながら原宏の業績に対し敬意を表して読者に一覧をすすめておきたい。

防人日記ノ事

防人日記ハ青柳種信が寛政六年二十九歳ノ春黒田家ヨリ差遣サルル警衛人数ノ一人トシテ渡航シテ暫ク勤務シタ時ノ紀行デ沖ノ島ノ神格ト鎮座ノ由来ヲ公頌シタ長歌、在島中ノ感想、情景等ヲ述ベタ数多ノ短歌モアリ文学的ノ著作トシテ頗ル興味ノ多イモノデアル

平野次郎国臣ガ普請方ノ小役人ヲ務メ小金丸種徳ト名乗リ二十四才（嘉永四年）ノ時、社殿修理ノ御用ヲ帯ビテ大島ニ出張ノ折　沖島ニ渡航シテ滞在中青柳種信ノ防人日記ヲ写シテ奉納シタルガ本書デアル　宗像

番外七番

防人日記

防人日記　上

青柳種信編録

寛政の六（一七九四）とせといふとしの弥生（やよひ）の廿八日（二月）、宗像の郡（こほり）の瀛津（おきつ）しまに、さきもり（防人）にまかる。そのよしいさゝか物に書つく。此島は、国の北のわた（海）中遠（とほ）そきて（退）、新羅（しらぎ）へ（辺）に近き嶋にしあれば、つねに防人（さきもり）を遣して守らせたまふ。此島を牛吐（うしはき）ます大神は、宗像の三柱（みはしら）の皇神（すめがみ）のうち、一柱の大神におはします。神御稜威（かみみいつ）たゞはしくませば、旅だつべきまへつかたより、ゆまはり（斎）清まはりて、家の内をもはらひ、かりに（仮）もけがらはしきことなからまくす。けふは首途（かどで）なればとて、鳥飼（とりかひ）の社（やしろ）の神づかさを招きて、はらへのわざなど請（こ）ふ。午時（うまのとき）ばかりに、あ

桜井神社大宮司浦毎賢（うらつねかた）が開設した「桜井文庫（仰古館）」があった。いま、その「仰古館書籍奉納姓名録」（桜井・伊牟田区林吏壮所蔵）を読むと、つぎのような記述が目につく。

この毎賢ぬしの預り司り玉へるかぎりのみや人ども（毎賢は筑前国中神職の惣司）の、物まなびのために、月ごとに書よみ、問あきらむべき日をきはめおきて、必ずとひ来つつ勤めいそしむべくあらまほしきおもぶきを、ねぎ奉りしをさへに、（藩庁より）許し給はりしかば、すなはち、ひとびとをつどへて、この葉月（八月）廿日あまり八日といふに、この学びの道のおやとある青柳種信の翁、古事記の端ことば（序）を、よみとき玉ひて、開講の式いとゐやゐやしくことをはりぬ。云々

あるいは、平川千淵伝写の原本は、この桜井文庫のものではなかったか。実証はないが、思いつくままに記しておく。

ひまふ。浪風のおどろ〳〵しきにはやうかはりて、うつばりの塵もちるばかりなり。

とあるが、種信が得た真の果報は、この沖ノ島在番中に第九代藩主斉隆の詮議により、国学修行のための書籍購入費を受けることに決していたし、この月の下旬には、家を地行四番町上に借り、ますます国学の研究に精進することができるようになったことである。原宏によって紹介された内閣文庫本『瀛津島防人日記』下巻の末尾に、「青柳種信　上」とある。この防人日記は、勤番の報告書ではなく、藩庁・藩主に対する国学「事始め」風土記的なものへの「事始め」であったというべきであろう。

このような事情からいっても、防人日記は、もちろん、島での日々の生活記録であるが、その記述は、帰宅と同時的に完結したものでなく、素述や備忘帳を整理し、文章を推敲し、後日に完成し、上書したものである。寛政九年（一七九七）六月廿六日付内山真龍宛種信書簡には「三、沖津島日記近々の中送付添削を乞ふ」とあり、同年十一月二十一日付種信宛宣長書簡には「一、おき津島日記下巻出来申候はゞ御見せ可ㇾ被ㇾ下候」とある。なお春日政治は、「日記全巻が出来上つたのは寛政十一年（一七九九）頃のやうであるから、多少練つたものではあらう」と述べている。

小山正の『内山真龍の研究』に紹介されている真龍の日記によれば、享和元年（一八〇一）十一月廿五日に、防人日記を、真龍が抄出したらしいことが記されている。この年は前記寛政十一年の翌々年にあたる。深交のあった種信と真龍との関係からして、やはり防人日記の完成まで、相当の年月をかけて推敲したものと思われる。

三、あとがき

おわりに、ここに紹介する「瀛津嶋防人日記」（上・下二巻）について、少々の考察を加えてみよう。この防人日記を謹写した人物は、原宏は、平野国臣とする宗像大社の注記を、保留しているが、その「貝鐘の音も聞えず皇神の国ぶりしるき沖つしまかな」という和歌の歌風、筆跡からみても、その保留は必要ないのではないかと思われる。

この防人日記は、種信……桜井の平川千淵→槇の園ひろよし→藤田正兼→小金丸種徳（国臣）という経路を経たものであるが、正兼は、種信の国学の門弟であり、歌人として知られた人物で、その遺詠に『緑の舎集』があり、文集に『緑の舎文集』『古野のづばな』『都梵須美礼』等があり、『筑前国続風土記拾遺』の完成に功労のあった協力者の一人である。

正兼は、奥書の「とし道・ひろよしともに誰人ともしらず」としているが、「さくら井の平川千淵」については、そのようには書いていないので、あるいは知っていたのではないかとも思われる。志摩郡の桜井には、種信の全面的な助力により、文政一三年（一八三〇）

追手なればとて、すこし心をのどめてゐたりしを、申の時ばかりには大島つきぬ。

種信が、沖ノ島で敬神の誠をいたし、献本・献木をして、国学成就の祈誓をこめた消息は、以上の抜萃によって、その大略を知ることができよう。足軽だから勤番を命じられたものであるが、種信自身からすれば、かねての願望がかなえられたのであるから、これほど恵まれたことはなかった訳である。

㈢　風土記的学風への事始め

防人日記の述作者青柳種信は、『古事記』『日本書紀』『古風土記』『万葉集』などの、古典の研鑽からはじめて、筑前の神社史の研究、その他古器物学的についても、それぞれ勝れた業績を遺したのであるが、その最大著作は、なんといっても、『筑前国続風土記拾遺』である。この書物は、不幸にして、種信の在世中には成稿をみず、未完成であって、その子長野種正・青柳種春・門人児玉琢・坂田良賢・藤田正兼により、やっと完成に近い程度にまとめられたものであるが、種信は、早くから、貝原益軒の『筑前国続風土記』について知悉していたろうし、その資性から、筑前はもとより、広く及ぶかぎりの諸地方の事物についても、歴史的考証・地理的観察を加えつつ、これを総括的におのれの学殖・教養としたと思われる。そして、そのような学殖と教養とをもって、沖ノ島のみならず、大島・田島にかけての、いわゆる宗像三社に即して、これを記録化し、世のいわゆる風土記的著作の「事始め」にあたるものとして提示したものが、本人が意識したか否かは別として、まさに、この防人日記である、といえよう。

もちろん、防人日記は、その名のとおり日記を主体としたものであるが、その内容には、地理あり、歴史あり、寺社あり、古物あり、民俗あり、しかも、その下巻の宗像神社所伝の古文書・古記録についての考証など、すでにして、種信の爾後の学風の主軸をなした、風土記的なものへの指向が、すでにして窺いみられるのである。そして、それは、この日記の末尾に

家に帰り着ぬ。庭をみれば、わがゆく時は、池の藤浪のやゝ長く垂て、今五日六日ばかりも在(あり)まねば、などおもひつゝ出立しを、其日頃経る迄はわすれがて成しを、今見れば、花の咲きつらんとおぼゆるさまもなくて、下葉のやゝ色付にける、わづか四月・五月のほどに、春と秋とのうらうへなる世のありさまは、あまたの年経たらんやうになもおもはるる。されども、家の内は、うからやからつどひて、いとにぎびにしかば、かたみによろこびあへる。いろせに見すとて

秋くれば草はみなからうつろへど吾背の君はいやさかえます

ちかきあたりの人など訪ひ来る。盃とりかはして、更行までうた

は　これの葉の　とこしきが如　これの実のかぐはしきごと
万代に　さかえをゆかん　皇神の　御魂たばりて　ちはひ給はね

反歌

時じくのかぐのこの実をまつり置て我もあえてんそのとこしきに

10　級戸辺のいぶきしづけかれば韓人のよりくとふ事もなく、手むだきをれば、防人等は、ひたすらに神につかふる人の如く、朝夕に御前に落ちりたる木葉をはらひ、石をしきなどしてつかへまつる。神山の内に入には、つねに声とゞろかしてゆく。もし、ひそかにゆけば、神の遊び玉ふにゆきあふといひ伝へたり。

11　此嶋の大神いたく汚穢を忌玉ふに依て、山中にてかりにも唾・小便ることなし。もし過ちてけがす時は、其地の土をすくひ、海に持出で、磯に捨て、清き砂を、先の土取し跡に埋みて、本の如ならしおく。是を犯してしかせざれば、忽狂乱などする。近頃にもさる人ありて、誰もよくしれることぞかし。さるべき設にとて、昨日より大なる竹筒作り置て、緒して腰に付つゝのぼる。

12　隣国の人此島を見つけて不」言島と云。そは神異のことあるをば家にかへりて人にはいはぬよしの名なり。

13　崎守にある日数もやうやく立ぬれば、かはりの舟やくると、日々に山に登りて、南の海づらを詠つゝあり、忌詞なども、やうやく、いひあやまたずなりぬ。

14　人のからきめみるにつけ、帰るさのほど心もとなくなん。後に舟人の語るをきけば、大島に風守りせしほど、いささか触穢のこと有し、これをや神の咎め玉ひけんと乞いふ。いとかしこくなん。

15　同廿四日、庭よしとて舟出す。二三里もや来ぬらんとおぼしきに、風あしとて、又本の如く漕つれて帰りぬ。

同廿五日。なごり高しとて出たゝず。

同廿八日。風かなひぬれど、舟子どもさきにこりて、いざとて舟出す者もなし。

同廿九日。暁がたより、艮の風心よく吹渡りて、海の面もなぎたり。舟人ら猶たゆたひしを、巳の時近くなりてなも、舟を出せば、なほ日ごろは海浜の住居にわびて、帰るべき日をのみかぞへたりしを、今はと出たつには、さすがになごりをしまるゝ心ちす。海つ路五里ばかりも来ぬらんとおもふほどより、風はやく強く吹しきりて、浪の華を咲そふばかり也。艫より懸浪うちいるれども、

しら浪のやへをるがうへにあやしくもいます神かも沖つ御島は磯におりゐて、海の平けかりしを互に悦びあへり。神司は懸崖の下なる磯にいほりし、忌こもらす。

6　此嶋に来る例。七日の間朝ごとに潮にみそぎて、その間山中に入ことなし。七日に当る日に、正三位志賀の神を票るといふにまゐりて、八日に大神の宮にまゐる。毎朝海水を浴て正三位社にまゐることは、大神の宮には、つねはみだりに参らず。神威を恐れて也。其後もかはることなし。

7　神づかさの請によりて、神代巻（日本書紀）をよむ。又、おのれ上代の学びのことを祈奉らんと、ふりはへて思ひ来しかば、祈の御手ぐらにとて、豊後国風土記と、延喜式の大祓の考とを写して奉る。

8　（四月）十六日、大神の宮にまゐるとて、まず正三位の社にぬかづく。岩さきのさし出たるところに御社あり。（中略）正三位社より坂路五六丁ばかり登り行ほど、日のめもみえぬ迄木立しげれり。宮地は一の嶽の麓、大なる巌の物の足のごとく三ツ聳たるはざまにおはします。いと神さび、心すごき所也。をろがみまつりて、のりとをさゝぐ。

懸まくも畏く、言まくも綾に忌々しき瀛津宮に鎮坐す、田心姫命・湍津姫命・市杵島姫命と御名は申て、称辞竟奉る。三柱の皇神等の大前に畏み畏みも申す。種麿皇朝の上つ大御手風を痛く慕奉り、古き御史等を璞の年月重ね読考ふと雖も、従来浅き心に真白玉潜得る事の難く、足曳の山の麓山の浅き智には蔭豆羅取得べき手着なむ無く在き。畏き皇大神は御稜威逸早く世人を幸給ひ守り給ふ事、満潮の弥益に御坐ば、種麿祈申し願申事を、神在随安く平くぞ聞食、真寸美の鏡押羽ぶる事の如く、上つ大御代の大御手風等百隈を落ちず、明らに審らに教給ひ悟らしめ給ひ、又僕が親族産子の八十綿連も常盤に堅磐に厳し弥桑枝の如くに立栄しめ給へと、小鹿なす膝折伏せ、鵜じもの頸根衝抜て恐み恐みも申す。

神山のうち、何となくかぐはしく、心もすがゝく、かの神楽哥に、榊葉のかをかぐはしみ、とうたへるも、かゝるをりにこそとおもひえ侍りぬ。祭終りて、神主の斎屋にてえらぎす。

9　（四月）十七日。おのれが家に在し橘樹をもてまゐりしを、御前にうゝとて、そへてたてまつる哥

霜おけどいや常葉なる　とこよもの　あへたちばな　ほつ枝に
白和幣かけ　しづ枝に　青にぎてかけ　はろ〳〵に　いこじまゐりて　かしこきや　神の御前に　ほりうゑて　のみまつらく

宗像の郡の瀛津しまに、さきもり（防人）にまかる。そのよしいささか物に書きつく。

2　此島を手吐ます大神は、宗像の三柱の皇神のうち、一柱の大神におはします。神御稜威ただはしくませば、旅だつべきまへつかたより、ゆまはり清まはりて、家の内をもはらひ、かりにもけがらはしきことなからまくす。けふは首途なればとて、鳥飼の社（八幡）の神づかさを招きて、はらへのわざなど請ふ。（中略）古言に心よせある人々、おひ〳〵おのがもたる本（ふみ）なんど餞してあたふ。

3　四月朔日、同じ所（大島）なり。瀛津しまにわたる人々、爰（ここ）より、朝ごとに海に入て身そぎす。そも〳〵此浦は、いつしき皇神の静まります（気）けにや、人ごとに、物いはひして、けがらはしきことを、いたく忌はゞかる。身まかりたるをいむはさらにもいはず、女の月のけがれあるをば、別戸（コトイヘ）をつくりて、主の家にいるゝことなし。そのほか、よのつねはなほざりに打過すことをも、此浦人はつゝしみて、かりにも犯すことなし。（中略）いづこも、みやこめきたる所は、人の心さかしだちて、物いみなどするをば、愚なることにいひあふめるを、かゝるひなびたる所には、かへりて古の風（フリ）の残れるもの也。

4　瀛のしまはいづこぞ、と見れど見えず。北のかたは、凡（すべ）て何もみえず。猶（目）めいたき迄みるに、辛くして浪のひまより見出たり。津しまの少し東の方に、嶺二あるが、海の中よりものゝ角さし出したらんが如し。「おのが行べき嶋はあれにこそ」といふに、皆人肝ぎえたり。いかで一たびは御嶋にまゐりてしかな、と心にねぎしかど、いまかくものすべしとは思ひかけざりしを、いとたふとくて、遙にをろがみまつりて。

いつしかも見むとおひしむなかたの沖つ御島を見るがともしさ

5　「いざ、よそひたゝせよ、われ（神主河野氏）も共に舟出せん」とて漕出たり。神中（かみなか）（海の途中）に行ける時、手向すとて、

蒼海原（あをみはら）神のみなかにぬさまつり幸（さき）くもがもとこひのむわれは

左（ひだ）り右（みぎ）見めぐらせど、向伏雲（むかふすくも）のみ也。あへて漕出し七（ママ）の舟は、木葉のうきたらんよりもちひさし。浪のたつとにはあらねど、大海のゆらふに、人々心あしみ（船酔）して、かしらを舟簀（ふなす）にあてゝ、物をもえいはず。舟子どもは、「神の御心にかなひ玉へる人々にこそあらめ。年ごとに行かへども、かゝるしづけき海をわたりし折なんなき」とぞいふ。近（ちか）づくまに〳〵仰ぎみれば、其さまいとあやしくて、他国（ひとくに）に漂着（ただよひつき）たる心して、天皇（すめらぎ）の所食国内（しろしめすくぬち）ともおもはえず。

又真淵をも祖師として常に追慕はしてゐたが、歌は真淵に比してたとひ気韻に乏しい憾はあるが、格調がより醇であつた。この点に於てはむしろ（平賀）元義などに迫るものがあるが、惜しいかな気魄に欠けてゐる。寛政九年に同門の近藤春彦が長崎に下る途次、翁を訪ねて来た時の事を、其の「四方賓客来訪」といふ備忘の帳に記して

鈴屋翁（宣長）の門人のよし哥を尊として諸国を游すれども其歌も未熟にして殊に古言をしらず浅学といふべし

と言つてゐる。当時三十二歳の翁が、四十余歳（翁自ら記してある）の春彦に対してかう評したのは、学問に於て作歌に於て如何に自負してゐたかが分ると同時に、和歌は古言を以て読むものとしてゐる信条がよく表われている。実に此の時代には未だ形を主としてゐた人が多かつたのだ。翁は頭が余り古典研究に傾き過ぎ、常に考証的思考に向つてゐて、要するに内容に清新味が欠け、詩趣に乏しかつたことは事実である（黒点筑紫）。しかし鈴屋門下としてはその学問と共に作歌も一二に伍する事が出来る。翁の性格は大半が温和篤実なる人物と言つてゐるやうに、其の肖像画を見ても面容極めて温雅の人と思はれるが、其の割合に読口に歌才があり、かつ気力があるものと言ふべきであらう。而も九州に於ては重きをなす人、殊にあの時代に古風を読んだ一人者であらうと思ふ。若し翁をして永く江戸に在らしめ、新古その一方に徹底せしめたならば、更に進境を見て歌人として名をなしたかも知れないと思ふのである。

と詳述している。このような点からみても、種信にとって、この防人日記が、その歌人的生涯にとっての記念塔ともいうべき重要性をもっているといえよう。

(二) 国学者種信としての渡島

「本論の一」では、種信の万葉的素養のただならぬことを、春日政治の立言にしたがって、あらあら実検し了った。防人日記の基調に、古事記・日本書紀をはじめ、いわゆる国学的な学殖の広く深く存することは、この日記をすこし丹念に読みすすんでみたら、何人にも感得される事実であろう。この「本論の二」では、実は、この防人日記こそ、そのような学殖に自信をもった種信が、六か年にわたる江戸生活の間に蓄積した学力のほどを、わが郷土において、実証しようとして、いみじくも見事に成功した業績であり、しかもなお、そのことを、沖ノ島——宗像三神の神畏にかなうものとして、信仰的な色彩をこめて綴ったもので、柳園国学の出発宣言にひとしい文献であることを、種信の日記の文章の抽出によって証明してみたい。

1　寛政の六とせ（一七九五）といふとしの弥生（三月）の廿八日、

かづき得てわれに得しめよ大海の水底てらししづくしら玉
わたつみの神の釧やたえぬらん浪問に拾ふあはみしらたま

註四五　吾はもや

○われはもや安見児得たり皆人の得難にすとふ安見児得たり……
二・九五

吾はもや白玉得たり皆人の得がてにすとふ白玉得たり

註四六　天の河門・月人の

○彦星と織女と今夜逢ふ天の河門に波立つなゆめ……
一〇・二〇四〇

○黄葉する時になるらし月人の楓の枝の色づく見れば……
一〇・一二〇二

月人のあまの河とを船出していづことまりとさしていくらん

註四七　しかしけらしも

○天地の共に久しく言ひ継げと此の奇魂敷かしけらしも……
五・八一四

後の代にいひつぐがねと皇神の此あと所しかしけらしも

註五〇　塩焼衣・和布苅塩やき

○志賀の白水郎の塩焼衣穢れぬれど恋とふものは忘れかねつも……
一一・二六二

○志可の海人は藻刈り塩焼き暇なみ髪梳の小櫛取りも見なくに……
三・二七八

〔以上・下巻〕

防人日記における種信の万葉的歌風の検討は、これで一応終ることにするが、この歌風についての春日政治の説を読んでみよう。

柳園集には寛政四年二十七歳の頃からの詠が載つてゐるから、防人日記の歌は翁としては初期と見てよいのであるが、江戸に於て万葉集を研究した直後ではあり、未だ妻帯もしない壮年であり（翁は三十三歳にして始めて久野氏を娶った）、殊に沖島御番といふ境遇が妙であつて、十分防人気分になることが出来たであらうし、而も総べてが実境に臨んだ実感から湧出てゐる（圏点筑紫）。翁も寛政十一年頃には、歌について宣長から注意を受けてゐることが、現存の宣長からの手紙でも知れるが、さうした時の方が、堂々たる先生になつてむやみに題詠をしたり、他人に乞はれて強ひて作つたりする歌よりも潑剌としてゐる筈である。翁の歌が新古を並べ詠んだのは、もとは宣長に倣つたのかも知れないが、彼の古風だけは自分の万葉研究から自然に迸り出て来たらしく、徒らに宣長に模した跡は見えない。寧ろ師に譲らざる生気が表れてゐる。

○わが背子をな越しの山の呼子鳥君呼びかへせ夜の更けぬとも……
一〇・一八二二

○答へぬにな呼び響めそ呼子鳥佐保の山辺を上り下りに……
一〇・一八二八

○朝霞八重山越えて呼子鳥鳴きや汝が来る屋戸もあらなくに……
一〇・一九四一

木のくれ暗たどきもしらにおぼほしく我行道にたれよぶこ鳥

註三九　角嶋（長門国）

○角島の迫門の稚海藻は人のむた荒かりしかどわがむたは和海藻……一六・三八七一

秋の野の萩ふみしだき鳴く鹿のつづく角嶋浪まより見ゆ

註四〇　百ふねの津しま

○百船の泊つる対馬の浅茅山時雨の雨にもみたひにけり……
一五・三六九七

しらぎべに夕立すらし百ふねの津しまのねろゆ雲ゐたちくも

〔以上・上巻〕

註四一　石綱

○石綱のまた変若ちかへりあをによし奈良の都をまた見なむかも……六・一〇四六

註四二　栲角のしらぎの国

○栲縄の　新羅の国ゆ　人言を　よしと聞して……
三・四六〇（長歌）

みる郷のかたりにせんを栲角のしらぎの国に雲なたなびき

註四三　雪連

○右の一首は、雪宅麿のなり。（左記）……一五・三六四四

○（遣新羅使人）壱岐の島に到て、雪連宅満の忽に鬼病に遇ひて死去りし時に作る歌一首（題詞）一五・三六八八

註四四　しづく白玉

○海の底しづく白玉風吹きて海は荒るとも取らずは止まじ……
七・一三一七

○水底にしづく白玉誰ゆゑに心つくしてわが思はなくに……
七・一三二〇

○淡海の海沈着く白玉知らずして恋せしよりは今こそ益れ……
一一・三四四五

○古ゆ人の言ひける老人の変若つとふ水そ名に負ふ滝の瀬
○月読の　持てる変若水　い取り来て　君に奉りて　変若得しむもの……一三・三二四五（長歌）

おひ人のわかゆとふ水ぞ沖つしまありその岩井いざむすびてな

註三三　黄金花咲く　註三四　走井

○天皇の御代栄えむと東なる陸奥山に黄金花咲く……
一八・四〇九七

○落ち激つ走井の水の清くあればおきてはわれは去きかてぬかも……七・一一二七

目かがやくこがね花さく岩のまゆいづる走井のむはしよしも
はしりゐの水底さへにてるまでに五百箇岩むらにくかねかがよふ

註三五　岩根さくみて

○大鳥の　羽易の山に　わが恋ふる　妹は座すと　人の言へば　石根さくみて　なづみ来し……一一・二一〇（長歌）

玉ちはふ神につかふと崎守は岩ねさくみてけふもまゐです

註三六　高々にまつ

○白雲のたなびく山の高高にわが思ふ妹を見むよしもがも……
四・七五八

○石上布留の高橋高々に妹が待つらむ夜そ更けにける……
一二・二九九七

○豊国の企救の高浜高高に君待つ夜らはさ夜ふけにけり……
一二・三二二〇

○母父も妻も子どもも高高に来むと待ちけむ人の悲しさ……
一三・三三三七

高々にまつ吾をおきて深山べに鳴くべきものかしこほととぎす

註三七　かほ鳥の声

○春日を　春日の山の　高座の　三笠の山に　朝さらず　雲ゐたなびき　容鳥の　間なく数鳴く……三・三七二（長歌）

○春にしなれば　春日山　三笠の野辺に　桜花　木の晩こもり　貌鳥は　間なく数鳴く……六・一〇四七（長歌）

○貌鳥の間無く数鳴く春の野の草根の繁き恋もするかも……
一〇・一八九八

註三八　よぶこ鳥

○神名火の伊波瀬の社の呼子鳥いたくな鳴きそわが恋まさる……
八・一四一九

○尋常に聞くは苦しき呼子鳥声なつかしき時にはなりぬ……
八・一四四七

○つのさはふ磐余も過ぎず泊瀬山何時かも越えむ夜は更けにつつ……三・二八二

○つのさはふ石村の山に白栲に懸れる雲はわが大君かも……一三・三三二五

註二八　かしふりたつる

○舟泊てて戝柯振り立てて廬せむ名子江の浜辺過ぎかてぬかも……七・一一九〇

○大船に戝柯振り立てて浜清き麻里布の浦にやどりか為まし……一五・三六三二

○青波に袖さへ濡れて漕ぐ船の戝柯振る程にさ夜更けなむか……二〇・四三一三

角障経岩瀬の磯に潮まつと戝柯ふりたつる蜑の釣ふね

註二九　橘・いや常葉

○橘は実さへ花さへその葉さへ枝に霜降れどいや常葉の樹……六・一〇〇九

註三〇　橘

○橘の　成れるその実は　直照りに　弥見が欲しく　み雪降る　冬に到れば　霜置けども　その葉も枯れず　常磐なす　いや栄映えに然れこそ　神の御代より　宜しなへ　この橘を時じくの　香の木の実と名づけらしも……一八・四一一一（長歌）

反歌一首

○橘は花にも実にも見つれどもいや時じくになほし見が欲し……一八・四一一二

霜おけど　いや常葉なる　とこよもの　あへたちばな　ほつ枝に白和幣かけ　しづ枝に　青にぎてかけ　はろ〳〵に　いこじまゐりて　かしこきや　神の御前にほりうゑて　のみまつらくは　これの葉の　とこしきが如　これの実の　かぐはしきごと　万代にさかえをゆかん　皇神の御魂たばりて　ちはひ給はね

反歌

時じくのかぐのこの実をまつり置て我もあえてんそのとこしきに

註三一　福草（三枝）の

○夕星の　夕になれば　いざ寝よと　手を携はり　父母も上は勿下り　三枝の　中にを寝むと……五・九〇四（長歌）

こゞしかも岩の神さび福草のみかみの嶽に雲ゐたなびく

註三二　わかゆとふ水

○わが袂まがむと思はむ大夫は変水求め白髪生ひにたり……四・六二七

風まもり大しまのへに我をれば鐘のみさきにしら浪たつも

註二二　天の安河

○天照らす　神の御代より　安の河　中に隔てて　向ひ立ち　袖振り交し……一八・四一二五（長歌）

註二三　神がら

○玉藻よし　讃岐の国は　国柄か　見れども飽かぬ　神柄か　ここだ貴き……二・二二〇（長歌）

○み吉野の　蜻蛉の宮は　神柄か　貴くあるらむ　国柄か　見が欲しからむ……六・九〇七（長歌）

○神柄か見が欲しからむみ吉野の滝の河内は見れど飽かぬかも……六・九一〇

○蜻蛉島　日本の国は　神からと　言挙せぬ国　然れども　われは言挙す……一三・三二五〇（長歌）

○立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし……一七・四〇〇一

註二四　ともしさ

○味こり　あやにともしき　高照らす　日の皇子……二・一六二（長歌）

○坂越えて安倍の田の面に居る鶴のともしき君は明日さへもかも……一四・三五二三

いつしかも見むとおもひしむなかたの沖の御島を見るがともしき

註二五　ゆふたすき

○わが屋戸に　御諸を立てて　枕辺に　斎瓮をすゑ　竹玉を　間なく　貫き垂り　木綿襷　かひなに懸けて……三・四二〇（長歌）

○木綿襷　肩に取り懸け　斎瓮を　斎ひ掘り据ゑ　天地の　神祇にそわが祈む　甚も為方無み……一三・三二八八

むなかたにいつく祝部のゆふたすきかくるもかしこ神のむかしを

註二六　梓弓はるは

○梓弓春山近く家居れば続ぎて聞くらむ鶯のこゑ……一〇・一八二九

梓弓はるはくれしをわたつみのかなしの花はいとど咲そふ

註二七　角障経岩瀬

○つのさはふ　石見の海の　言さへく　韓の崎なる　海石にそ……二・一三五（長歌）

註一五　立さふ

○畏きや　神の渡は　吹く風も　和には吹かず　立つ波も　凡には
立たぬ　とゐ波の　立ち塞ふ道を……一三・三三三五（長歌）

わたつみも心あらなん白浪の立さふべしやわぎへのあたり

註一六　漕たみゆけば

○何処にか船泊てすらむ安礼の崎漕ぎ廻み行きし棚無小舟……
一・五八

○磯の崎漕ぎ廻み行けば近江の海八十の湊に鵠多に鳴く……
三・二七三

○海の底沖は恐し磯廻より漕ぎ廻み行かせ月は経へぬとも

註一七　蜷のわたかぐろき

○にほひよる　子らが同年輩には　蜷の腸　か黒き髪を　ま櫛もち
……一六・三七九一（長歌）

註一八　細螺子（古事記の歌謡にもある）

○香島嶺の　机の島の小螺子を　い拾ひ持ち来て　石以ち　突破り
……一六・三八八〇（長歌）

註一九　わたつみの神の宮

○常世に至り　海若の　神の宮の　内の重へ　妙なる殿に　携はり
二人入り居て　老いもせず　死にもせずして　永き世を　ありけ
るものを……九・一七四〇（長歌）

あべのしま　漕たみゆけば　青海に　しろき浪たつ　蜷のわた
かぐろき巌　わたつみの　ちひろの底ゆ　奇しくも　高くたゝせ
り　そのいはほ　いはひもとへる　細螺子の　象なしつゝ　万世
に　神さびをるか　わたつみの　神の宮こそ　鱗なす　やかすは
有とへ　しただみなす御門もあらん　その宮は　爰にましけり
其みかど　爰にましけり　かしこけど　行てはやみん　わたの宮
こそ

反歌

なりかよひ来乍かく見むあへのしま鵜のすむ石による浪の如

註二〇　名児山

○大汝　少彦名の　神こそは　名づけ始めけめ　名のみを　名児山
と負ひて　わが恋の　千重の一重も　慰めなくに……六・九六三

註二一　鐘のみさき

○ちはやぶる金の岬を過ぎぬともわれは忘れじ志賀の皇神……
七・一二三〇

○四可の白水郎の釣船の綱堪へなくにこころに念ひて出でて来にけり……七・一二四五

○之加の白水郎の塩焼く煙風をいたみ立ちはのぼらず山に棚引く……七・一二四六

○壮鹿の海人の火気焼立てて焼く塩の辛き恋をも吾はするかも……一一・二七四二

○思香の白水郎の釣し燭せる漁火のほのかに妹を見むよしもがも……一二・三一七〇

註九　放りそ（魚）

○畳薦牟良自か磯の離磯の母を離れて行くが悲しさ……二〇・四三三八

註一〇　たまもかる

○難波潟潮干に出でて玉藻刈る海末通女ども汝が名告らさね……九・一七二六

○玉藻刈る井堤のしがらみ薄みかも恋の淀めるわが心かも……一一・二七二一

（その他、枕詞に多用されている）

志賀の蜑の小舟つらなへ放りそのありそのうへにたまもかる見ゆ（註一〇）

註一一　也良の崎

○沖つ鳥鴨とふ船の還り来ば也良の埼守早く告げこそ……一六・三八六六

○沖つ鳥鴨とふ船は也良の埼廻みて榜ぎ来と聞え来ぬかも……一六・三八六七

註一二　から泊のこのうら浪

○韓亭能許の浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日は無し……一五・三六七〇

春霞たちかくしたりから泊のこのうら浪見てましものを

註一三　貝をひりひてゆかん

○帰るさに妹に見せむにわたつみの沖つ白玉拾ひて行かな……一五・三六一四

○多麻の浦の沖つ白珠拾へれどまたそ置きつる見る人を無み……一五・三六二八

神さぶる磯良が崎による貝をひりひてゆかん袖はぬるとも（註一三）

註一四　可也の山

○草枕旅を苦しみ恋ひ居れば可也の山辺にさ男鹿鳴くも……一五・三六七四

○磯の崎崎　荒き波　風に遇はせず　恙無く　病あらせず　急けく還し賜はね……八十氏人の　手向する　恐の坂に　幣奉り　われはぞ退る　遠き土佐道を……六・一〇二二（長歌）

○荒津の海われ幣奉り斎ひてむ早還りませ面変りせず……

一二・三二一七

沖つ渡ちへにたつともぬさまつり君しいのらばあにさはらめや

註三　息嘯の風

○大野山霧立ち渡るわが嘆く息嘯の風に霧立ちわたる……

五・七九九

わたの原嶋のさきくゝ雰たゝば君がおきその風としもはむ

註四　防人等が東の国よりはろゝと溟渤をわたりて仕へまつりしさま

○巻二〇に、時の兵部少輔大伴家持の長短歌を含めて一〇六首、巻一四に五首ほどある。

註五　栲領巾引はへたらんやうにて

○栲領巾の懸けまく欲しき妹が名をこの勢の山に懸けばいかにあらむ……三・二八五

○細領巾の鷺坂山の白躑躅われにほはね妹に示さむ……

九・一六九四

○栲領巾の白浜波の寄りも肯へず荒ぶる妹に恋ひつつそ居る……

一一・二八二二

○かへらまに（反対に）君こそわれに栲領巾の白浜波に寄る時も無き……

一一・二八二三

註六　足姫・神のみこと

○懸まくは　あやに畏し　足日女　神の命　韓国を　向け平げて……五・八一三（長歌）

○足姫御船泊てけむ松浦の海妹が待つべき月は経につつ……

一五・三六八五

足姫神のみことのいでましの御舟はてけむ浦ちかづきぬ

註七　香椎潟潮干の浦

○時つ風吹くべくなりぬ香椎潟潮干の浦に玉藻刈りてな……

六・九五八

註八　志賀の蜑

○然の海人は藻刈り塩焼き暇なみ髪梳の小櫛取りも見なくに……

三・二七八

之進殿二百石御簾下の士也。助教大人始は田安中納言（宗武）殿へ仕へ、御用人を勤め給ひ、野田帯刀殿といひける。今は退隠なり。此ぬし厚く親み給ひて、県居翁の著給へる書種々万葉集全部の考等を伝へ給ひ、且賀茂大人の秘置れし斉明紀の童謡の解をも自ら写して授られき。五年六年が間此の大人の恩もまた広大也といふべし。

以て其の事情の一班を窺ふことが出来る。

2　翁の江戸に出て諸成と往来するやうになつた当初から、此の考（真淵の万葉考）を写し始めたものであつて、いち早く万葉集の研究に従事したことが知られる。

前記の年譜に県居翁の著給へる書種々万葉全部の考等伝へ給ひ……

とあるのに思ひ合せられる。校本万葉集の解説に拠ると諸成から借りて考を写し、かつ私案の書入をしたことの奥書が寛政五年まであるのを見ると、江戸祇役中万葉研究をやつてゐたらしく見える。翁は翌寛政六年二月には福岡に帰つて、三月から八月まで沖島御番を命ぜられて、彼の島に渡り有名な防人日記をものしてゐるが、其の中の歌に盛に万葉語を用ゐ万葉調を行つてゐる（圏点筑紫）のであつて、作歌によつて其の造詣がわかると言つたのはこれである。

いまこの先学、春日政治の見解を、防人日記の歌文の実際について、検討を加えてみることにする。

そこで、まず、防人日記の本文・歌詞を通じて註の番号を附し、その言葉と万葉集の実例とを併記する。肉太の活字の歌は、種信の作である。なお、万葉歌は岩波書店「日本古典文学大系」本『万葉集』の「訓み下し文」によった。（註の番号は本文につけている）

註一　此島を牛吐きます大神

○海原の　辺にも奥にも　神づまり領き坐す　諸の大御神たち……

五・八四九（長歌）

○住吉の　現人神　船の舳に　領き給ひ　著き給はむ　島の崎崎

寄り賜はむ　磯の崎崎……六・一〇二〇（長歌）

○（鷲の住む筑波の山）……この山を　領く神の　昔より禁めぬ行事ぞ　今日のみは……九・一七五九（長歌）

○懸けまくの　ゆゆし畏き　住吉の　わが大御神　船の舳に　領き坐し……一九・四二四

註二　ぬさとりむけて・ぬさまつり

○ありねよし対馬の渡り海中に幣取り向けて早帰り来ね……

五一・六二

と下巻末に奥書している防人日記を用いることにした。原宏は、如上の引用文中に「自筆・異筆の識別はいまのところ断定しえない」としているが、最巻末の余白に認めてある

貝鐘の音も聞えず皇神の国ぶりしるき沖つしまかな

の歌風・文字からはじめて、上下全巻、多少の誤字・脱字はあるにしても、まず、国臣の写本に相違ないところである。原宏が底本に用いた内閣文庫本は、善本としてすでに公刊されているので、それと彼此参看することも益なしとしないし、他方、勤王家国臣もまた、歌人として、国学者としての勝れた一面をもった人物であり、その二四才の年に、すでに世上に有名であったこの防人日記を、藤田正兼本から筆写したことは、それ自体に意義のあることであり、さらにまた国臣が、その師青柳種春を通じて、その父親である種信に対する私淑のほども、この写本によって窺いしられるように思われる。

二、本　論

(一)　防人日記と種信の歌風

前掲の原宏の解説2において、彼は種信の防人日記の文章を評価し、

自作を含めて五〇首に余る短歌・長歌を載せた格調高い国文は、種信の面目を躍如たらしめる名著であり、早くから世に知られていた（圏点筑紫）。

とした。このような種信の国学者としての学殖というか、万葉的素養のただならぬものが、この防人日記にも顕著であることを明言し、すすんで種信と江戸の万葉学者野田助教（諸成）との密接な関係に触れたのは、九大名誉教授故春日政治であった。

春日政治の『青霧集』（岩波書店、昭和一四年刊）の「青柳種信の事ども」の一篇は、種信のみならずこの両者のあいだにおける、万葉学的なかかわりあいを、かなり詳述していて、参考となるところが多い。まず曰く、

1　翁（種信）の万葉集に造詣の深かったことは、最もよく其作歌に表れてゐる。而も比較的早い時代の作から其の跡が著しいのである。其の江戸に在る間は常に野田諸成に就いて其の説を聴いてゐた。殊に万葉集に関する修養は多く諸成から得てゐるものと言つてよいやうである（圏点筑紫）。今此等の関係を見る為には、翁自記の年譜（筑紫いう、昭和二〇年戦火により、県立図書館にて焼失）を借るのが最も好いと思う。

寛政元年己酉三月八日同僚十八人と共に江戸邸に宿直す勝次年二十四

（中略）

四月江戸に着桜田邸に直次。今年江府古学の士を尋訪て野田大人助教殿に謁す。県居翁（賀茂真淵）の門人、子息は野田富

らぬほど、厄介な神ノ島である。

全島は、対馬暖流に洗われているので、亜熱帯植物に掩われており、オオミズナギ鳥（うがち）・アブ・カ・ヤマヒルなどが生息している。ネズミは、多分そこに営まれてきた人間生活につれて、上陸し寄食し繁殖したものであろう。なお、ヘビは見かけなかったし、住んでいないということである。

2　種信の「防人日記」は、寛政六年三月二十八日福岡をたち、四月九日に沖ノ嶋に着き、とどまること三ヵ月余にして、七月二十九日同島出発、八月四日福岡帰着に至るまでの紀行であるが、優に地誌・探検記でさえもある。自作を含めて五〇首に余る短歌・長歌を載せた格調高い国文は、種信の面目を躍如たらしめる名著であり、早くから世に知られていた（圏点筑紫）。したがって写本も多く、『国書総目録』（岩波書店）に登載するものだけでも、内閣・東博・（安政二写）・九大（天保四写）・京大・国学院大（享和二年）・東大・福岡・多和などがあり、版本は東大、活字本は宗像郡誌下巻（昭和七）と明治三十三年刊の一書がある。このうち「福岡」は昭和六年の目録にあって戦災で焼失した福岡図書館本と思われるが、このほかに現在宗像神社所蔵の嘉永四年の写本がある。表紙に平野国臣自写と書かれているけれども、自筆・異筆の識別はいまのところ断定しえない。明治三十三年刊の活字本を別とすれば、宗像郡誌本は比較的近時の上梓にかかるものであるが、なにぶん地方の郡誌であって江湖の要望に応ぜられないこと、また脱落や誤植も多く、復刻に用いた底本の典拠が明示されていないことが惜しまれる。

このたびの底本に用いた内閣文庫本『瀛津島防人日記』は、上巻の巻首に「教部省文庫印」・「図書局文庫」・「日本政府図書」と三個の蔵書印を押すものであるが、かなりの善本であるといってよい。上巻の巻末に肥前「養父郡牛原邑四阿屋郷」（現在佐賀県鳥栖市四阿屋）の三橋五百秋が、文化八年（一八一一）に種信の原本を請うて書写したと自署している。文化八年といえば、寛政六年から一七年たっているが、諸本のうちでは原著に比較的近い時刻のものである。

三橋氏については、伊藤常足が『太宰管内志』（肥前之一）で、宗像神社文書に出る東屋六所権現（東屋明神）を説くにあたって、「我友三橋氏東屋神社の神官なり」、「其祠官三橋真国語れりき」と書いている。

以上、原宏の解説を多としながらも、わたしは、この紀要に、あえて宗像神社所蔵本、平野国臣がまだ養子として小金丸家にあった時代に

嘉永四季春写之　小金丸種徳

大森善左衛門殿
皆田藤大夫殿
原吉蔵殿
沢木五郎右衛門殿

天保十二年丑五月十五日

佐野七平
古賀斉吉
野田恵八

種信が沖ノ島に勤番した寛政年間は、この書類に見える明和と天保両年の中間にあたっているので、島での種信らの身辺に遺し置かれた公的な装備・陣営具は、やはりこんなものであったろう。もちろん、種信はこのような事実は、承知のうえで渡島したものと思われるが、いま、注意をして、防人日記の冒頭の一文を読んでみると

寛政の六とせといふとしの弥生の廿八日、宗像の郡の瀛津しまに、さきもりにまかる。そのよし、いささか、物に書つく。

と記しているのであって、この勤番には、微禄足軽の身分を超越した、国学者青柳種信としての自意識が、つよく働いていることをすでにして感ぜずにはおれない。

ところで、防人日記については、一九六九年（昭和四四）に、三一書房が刊行した『日本庶民生活史料集』第二巻に、原宏が綴った、すぐれて詳しい解題と注記がある。読者にとって好文献であるので長文をいとわず便宜上番号をつけて引用する。

1　福岡県宗像郡玄海町の神ノ湊を北西に隔たること六〇キロ、玄海灘のただ中に浮かぶ周囲四キロの孤島沖ノ嶋は、切り立った絶壁で取り囲まれて深海に臨んでいる。島そのものが宗像三女神の一つを祭る「神の島」（神域）であり、今なお神聖・禁忌が持守されている。江戸時代には、大きな祭りの時期を春秋と決めても日を定めなかったこと、大島に遙拝所を設けていたことが、きびしい地理的環境を物語っている。大正十五年十月に「沖ノ嶋原始林」として天然記念物に指定された。沖ノ嶋は古来「不言嶋」とも呼ばれて、島のことは語らない。一木一草たりとも持ち出さないことになっているが、この秘境沖ノ嶋が特に世間の注目を広くあびるようになったのは、昭和二十九年五月に始まった「沖ノ嶋遺跡調査」（宗像神社沖津宮祭祀遺跡調査）以後のことである。しかし渡航・帰航の日時を予定しても天候次第で意のごとくならないのは、昔も今も変わりはない。

筆者（筑紫）は、昭和二年夏に初度、右の二九年以降の調査その他に関係して渡島すること四回、大島かぎりで中止すること一回、神ノ湊で風待数日に及ぶも渡海かなわず中止すること一回であったが、無事渡海といっても、沖ノ途中で風浪に翻弄されたこと二回。大型の船舶で、島には近づけても、最後のハシケが使えねば空しく引還すこともあるといった難儀な渡航もあることを覚悟しておかねばな

福岡藩の「年表」によると、沖ノ島にはじめて番人を置いたのは、寛永六年（一六二九）のことである。延宝九年（一六八一）の改めによると、「宗像郡沖津島（足軽加子百日交代、遠見番所無、御船二、伝道）とある。これでは人員が分らないが、貝原益軒の『筑前国続風土記』によれば「足軽三人、水主四人、大島より役夫二人、凡九人かはる〳〵来る。五十日を以て限とす。送りの舟は大島より二艘出す」とある（日限は後に百日と改められている）。この天保写しの記録の文字を見ると、足軽らしいなどといえば、語弊があるが、稚拙さがある。そこにかえって、そうした低い身分の人達の嘗めた労苦のほどが感じられる。当時、青柳種信は、すでに、ひとかどの国学者となっていたのであるが、その役務は、一般の足軽並みであったことはいうまでもないことである。あれこれ考えながら、この表紙とも五丁の書類を読んでみると、江戸時代における足軽の生活のわびしさがしみじみと想いやれるのである。いま、読方のむつかしい字には読み仮名を施し、意味の分りにくい言葉には小註を加えて、全文を載せることにする。

（表紙）

沖嶋御番所江遣置

御鉄砲併諸道具請帳

（本文）

一、三挺　御鉄砲、鉄具共ニ。但三匁五分（鉄砲の種別）

一、三ツ　古留袋、馬皮朱塗。

一、三ツ　胴乱、木綿くけ緒共ニ。

一、三ツ　同薬入、右同、木綿くけ緒共ニ古シ。

一、壱ツ　御鉄砲箱、棒共ニ。

一、三拾　鉄玉　但三匁五分。

一、六拾目　合薬。

一、壱具　鎌。

一、壱丁　鉄手子。

一、壱丁　驍矢（かけや）。

一、壱丁　唐鍬、せん（栓）共ニ。

一、三本　鉄熊手、但三ツ。熊手柄弐間、石突有り。

一、弐ツ　御紋付提灯、溜塗金物、棒共ニ。

一、一ツ　右入箱、系棹（かけざお）四間、結縄共。

一、一ツ　八畳　古畳、床八通り、表七嶋、へりこん（紺）。

右拾五同

右之通慥ニ受取申候以上

明和四年七月

高浜十兵衛
沢木十之進
熊沢十右衛門
小川専左衛門

山岡藤右衛門殿

目次

一、まえがき……七頁
二、本　論……一一頁
㈠ 防人日記と種信の歌風……一一頁
㈡ 国学者種信としての渡島……二一頁
㈢ 風土記的学風への事始め……二五頁
三、あとがき……二六頁
飜刻『瀛津島防人日記』上巻……二八頁
下巻

一、まえがき

青柳種信が、本居宣長に名簿を奉って入門したのは、種信二四歳、寛政元年（一七八九）四月のことであった。爾来、江戸の藩邸に祗役し、藩務のかたわら国学の研鑽に努め、同好の士と親交することおよそ五年。寛政六年（一七九四）正月一八日、麹町大火によって藩邸類焼、旅装焼失の厄に遭ったが、さいわいにも、藩主黒田斉隆からの拝領物によって、衣服その他を調えることができ、二月一九日には、無事に福岡城下に着き、しばらく麁原村の兄井本の家に寓した。

種信は、帰国後、やがて三月二八日、沖ノ島番所に微禄（六石三人扶持）の足軽として勤番に赴いた。その勤番は、防人日記の四月末の記述に「韓人のよりくといふ事もなければ、防人等は神に仕ふる人の如く」云々とあるので、韓国船の見張ということが主任務であったように思われるが、参考のため、貝原益軒の『筑前国続風土記』の拾遺（竹田定直校正）を引用してみよう。

嶋浦番所の事　寛永十七年江戸より対馬守、豊後守、加賀守、讃岐守、大炊守、掃部頭の連判の奉書来る。其時の公命の旨に依て、此時より九州海辺嶋々番所を立、異船の来を伺戒む。因レ茲本州にも、姫島、西浦、相嶋、大嶋、岩屋五所に番をかまへ、定番の士を遣し、足軽をも副らる。右の外他の嶋にも定番を被レ置。於呂嶋、白嶋、奥ノ嶋にも、番船を遣し守らしむ。又嶋々定番の外、家老中老の家士を加番とす。且四月より六月迄三月の間、大身の士を毎月三度宛、海上を廻シ、嶋々被レ令三巡見一。正保二年西浦の番所を止て、玄海嶋に移さる。又芥屋を立て、大嶋に番所を立添らる。脇浦、奥嶋にも番所を立らる。

これで見ると、きわめて厳重なもののようであるが、種信勤番のころは、どのようなことであったのか、詳細は未詳である。種信の防人日記によって想像するよりほかないのであるが、ここにつぎのような資料があるので、読者の一覧に供しよう（昭和三十九年一月一日、宗像神社刊行「宗像」第三七号「沖の島番所の装備」紹介者 筑紫豊）。

ここに紹介する記録は、かつて福岡市中浜町（現在、西区鳥飼）の故高野孤鹿氏の所蔵にかかるもので、明和四年（一七六七）七月に上下番交替の際に申送りした書類を、天保一二年（一八四一）五月に、佐野七平・古賀斉吉・野田恵八らが、勤番の心得資料として写し取ったもののようである。

嘉永四年八種徳ガ齢弐歳ナリシヤ 出生年月共縁家詳ニ知ルベシ

嘉永四年春ヨリ小夫丸経緯

杉の間しるす 誌

此歌 種徳 後平野次郎 国臣ト称 ガ瀧嶋ニテ咏メルナリ

防人日記

防人日記ノ事

防人日記ハ青柳種信ガ寛政六年甲寅歳ノ春、黒田家ヨリ差遣サルル警備人数ノ一人トシテ渡航シテ暫ク勤務シタル時ノ紀行ガ沖島ノ神格ト鎮座ノ由来ヲ公須シタル長歌、在島中感懐情景等ヲ述ベタル数多ノ短歌ヲ主トシテ文學的ノ著作トシテ頗ル興味ノ多イモノデアル

平野侯爵閣下ガ善請ガ小役人ヲ務メ小金丸雄助ト名乗ル三十四才（寛政四年）ノ時、社殿修理ノ御用ヲ帯ビテ大島ト出張ノ折、沖島ニ渡航シテ滞在中、青柳種信ノ防人日記ヲ写シテ奉献シタルガ本書デアル

種信

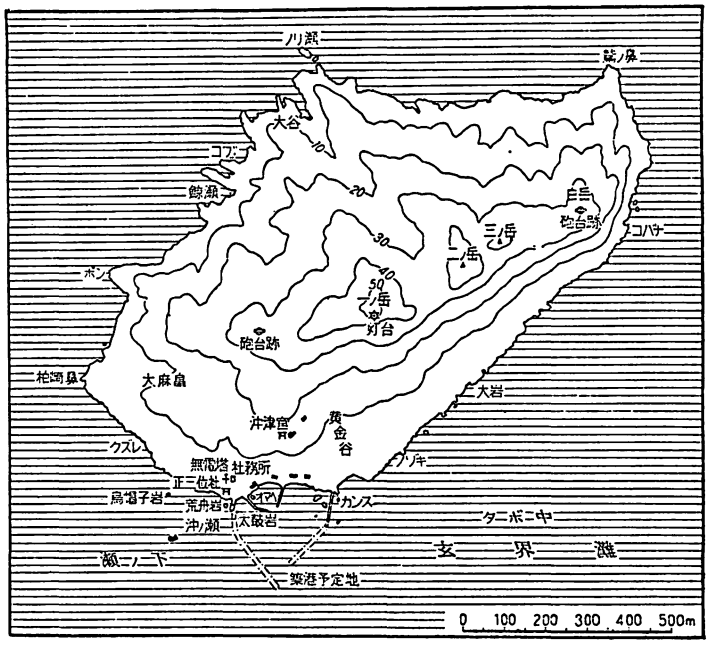
後書ヲ以ノ如ケ方ニ成ケレ

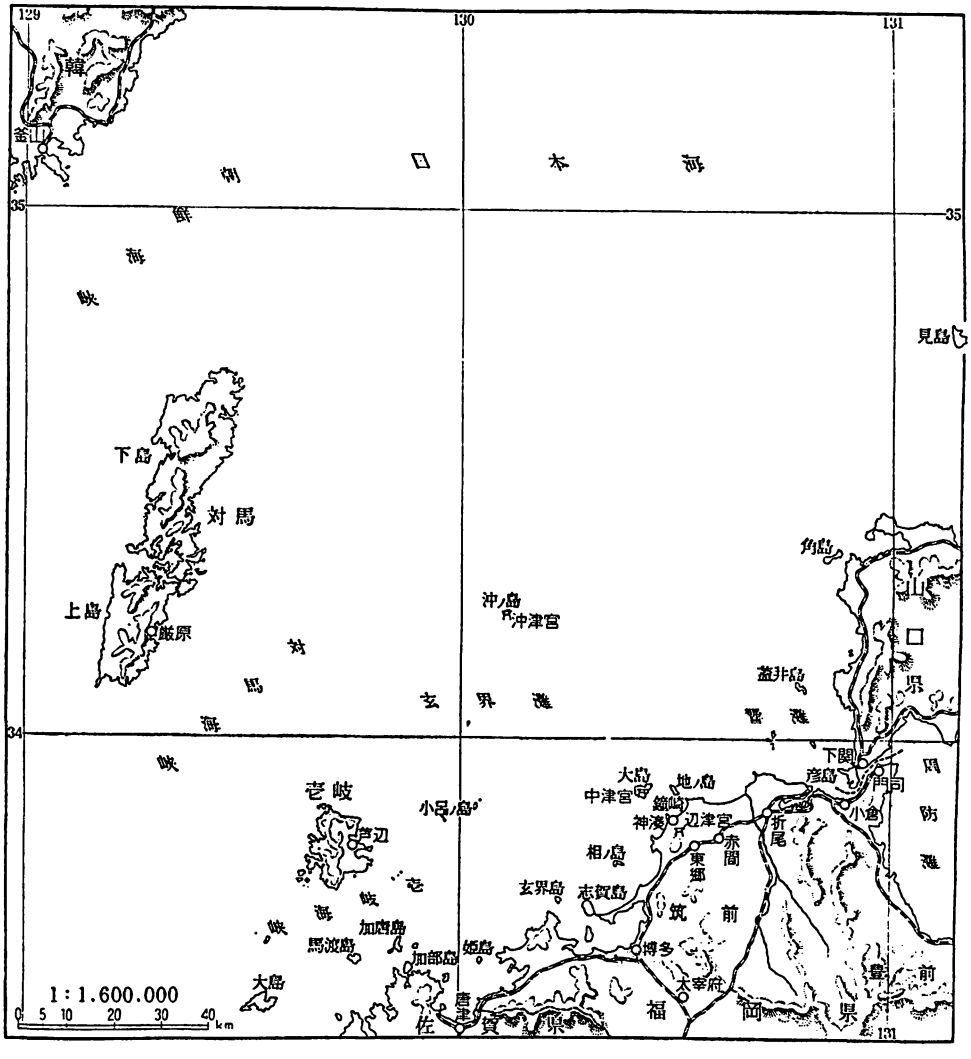
神山ノ

神山ノ木ハ枯レ枯レ

神山ノ木ハ枯レ枯レ

神山ノ木ハ枯レ枯レ


川瀬
藍ノ泉
大谷
コブシ
鯨瀬
戸馬
砲台跡
コバナ
三ノ岳
一ノ岳
二ノ岳
対台
砲台跡
柏岡泉
大麻島
二大岩
沖津宮
黄金谷
クスレ
無灯塔
社務所
正三位社
ノキ
烏帽子岩
荒舟岩
オマ
カンス
沖ノ瀬
太鼓岩
ターボニ中
瀬ニノ下
玄界灘
筑港予定地
0 100 200 300 400 500m


129
130
131
韓
釜山
朝鮮海峡
日本海
35
見島
下島
対馬
上島
厳原
対馬海峡
沖ノ島
沖津宮
角島
蓋井島
玄界灘
響灘
下関
彦島
門司
小倉
関門海峡
34
壱岐
芦辺
壱岐海峡
小呂ノ島
大島
中津宮
地ノ島
鐘崎
神湊
辺津宮
折尾
赤間
東郷
相ノ島
玄界島
志賀島
筑前
加唐島
馬渡島
加部島
姫島
博多
太宰府
豊前
大島
唐津
佐賀県
福岡県
1:1.600.000
0 5 10 20 30 40 km

小屋島　　沖ノ島　　御門柱

福岡市立歴史資料館研究報告　第三集

福岡藩の国学者 青柳種信の研究 (三)

―瀛津島防人日記(おきつしまさきもりにっき)―

筑紫豊

一九七九年三月

執筆者紹介

筑紫　豊　福岡県，福岡市文化財保護審議会委員

三島　格　前福岡市立歴史資料館館長

福岡市立歴史資料館研究報告　第3集

1979年3月31日

編集・発行　福岡市立歴史資料館
福岡市中央区天神1丁目15番30号

印　刷　福岡印刷株式会社
福岡市博多区東那珂1丁目10番15号